
雨夜の星

日野 美冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨夜の星

【Nコード】

N4618N

【作者名】

日野 美冬

【あらすじ】

【1話完結 短編集】雨が降ると景色がちよつとだけばやけて、普段は見えづらいものが見えることがあるのです。ひよつとしたらあなたも、「彼ら」を見ることがあるかも知れません。

11/2/15各話タイトルの先頭におよその長さを表す記号をつけました。▼1000字未満 3000字未満 5000字未満 1万字未満 ▲1万字以上

しずく渡り（前書き）

こんにちは、日野です。拙作をご覧くださいありがとうございます。評価・感想等いただければ嬉しいです。それでは。

しずく渡り

子どものころに起きることって、奇妙に受け入れてしまいがちだと思いませんか。

大人になつて何かのひょうしに思い出すと、そういえばあれはなんだったんだろう、それともこれは夢の記憶かしらと不思議に思うのですが、当時の自分にとってみればまったく自然なことだった、そんな思い出はないでしょうか。もしかすると、普通はないものなのかも知れません。私は、私にそういう思い出があるから、こんなふうに言つのです。

その思い出の主人公は、ひとりの痩せっぱちのお兄さんです。お兄さんは、今もたいがいこの街にいます。どこに住んでいるとか、学校に行っているのか仕事をしているのかとか、私はなんにも知りません。

最初にお兄さんを見たのは、私が小学校三年生の時です。ある日の、帰り道でした。

給食の後くらいからしとしと降り始めたこぬか雨が明けず、傘を持って来なかった多くの児童が昇降口でかたまりになって、うごうごとしていました。プリントばさみや体育着を詰めた袋、ランドセルなんかを頭の上に乗せて、わっと走りだす子どもがいます。傘の持ち合わせのある友だちを見つけて、肩をくっつけあつて歩き去る女の子がいます。それに勝手に加わつてこっぴどく閉め出される男の子がいます。濡れたグラウンドに入っちゃだめだと誰かが金切り声を上げ、置き傘がなくなったと誰かが騒ぎ、家族に迎えを頼んでいるらしい誰かが、携帯電話を学校で使っちゃいけないんだと主張する誰かともみあいます。

みんなが傘を持っていなかったのは当然でした。だってその日は、どのチャンネルのお天気お姉さんも、雨が降るなんて言わなかったのです。朝でかける時も、父も母も、傘持った？　なんて言いませ

んでした。ぴかぴかに晴れた、初夏の朝でした。昼時が近づくに
つれ、白っぽくかすんだ青空がずんずん冷めていき、半袖から突き出
た二の腕がうすら寒くなり、さあつと夏らしくない風が吹いたと思
ったら、それにのって霧のような雨が降り始めました。世界で一番細
い白い糸が、空をおおった白い雲から、いくつもいくつも縊り上げ
られて垂れ下がっているようでした。

そういうわけで、私もまた傘を持っていませんでした。私がみん
なと違ったのは、雨に濡れて帰るのがまったく苦ではなかったこ
ろです。いつそわくわくするのです。うごごする友人たちの間を
知らん顔で抜けて、しやらしやらするおしゃれなれんをくぐるよ
うに、私は雨の中に踏み出しました。あつ、かなちゃん。と誰かが
言います。雨だよ、と引き止めようとしてくれたのか、目に入った
ものの名前を口に寄せただけだったのかは分かりません。私はなん
にも答えずに、のつぺりしたグラウンドをつつきり、校門を出て自
分の家の方へ歩きました。

実際私は、夢中だったのです。産毛のはえた両腕や、ゴムでくく
った髪の前が見る間に白い小さな宝石に彩られていくのです。感觸
は、期待とは全然違っています。ふわふわして、しっとりして、け
れどなんの手触りもないのです。時折吹く風はひんやり首筋を撫で
ましたけれど、暑さの日増しに濃くなる頃合い、心地のよさが勝つ
ていました。まさ

私の家は住宅街のすみっここの小さな一軒家です。ゆとりはま総合
病院の真新しい建物の、裏に広がる住宅地です。瓦の色と柵の形が
少しずつ違うだけのそっくりな家が四つ並んでいる場所があるので
すが、その中でひとつだけ専用車庫がついているのがうちです。父
が特別車好きだったようには思いませんが、どうしてかうちにだけ
ありました。

お兄さんはその車庫の銀色の屋根の上において、短距離走に臨む人
のよう片方の膝と両手をついてかがんでいました。

そんなところに人がいるのを初めて見たもので、私はぽかんとそ

れを見上げていました。口もだらしく開いていたかも知れませんが、心底びつくりしたのです。

父よりも学校の先生よりもずっと若いのですが、私よりはるか
に年上に見えたので、私にはその人はお兄さんでした。今から思う
と、十二、三歳くらいの子でしたでしょう。まっすぐな黒い髪
に、私と同じに、小さな小さな真珠のような霧の粒がびつり宿っ
ていて、光もないのにしんしん輝いて見えました。灰色に染まった
空の中にＴシャツの黄色が鮮やかだったのも覚えています。彼は、
短距離走の姿勢でしきりと空を見つめて、いかにも困り果てた顔を
していました。ちつとも下を見ないので、私にはさっぱり気付かな
いようです。

さて、あんなところに上るのには、いったいどんな理由があつた
でしょうか。より高いところに用があるか、そこに何かを乗せてし
まったか、または、遠くの何かを見たいのか。お兄さんの表情は、
どれも当てはまらないようにも、どれでもしっくりくるようにも見
えます。

本当の理由は、そのどれもをこの細かな雨のようにぼかして、全
部重ねたような理由でした。

私にはそれまでとその時とで、何か違いがあつたようには思えま
せんでしたが、お兄さんにとってだけ、その時何かが変わったらし
いのです。困り果てた顔が、ぱっと明るみました。短距離走の姿勢
からは、短距離走は始まりませんでした。だいたい車庫の上では、
短距離にもほどがありますものね。お兄さんは雲を見上げたまま、
その方向に片手を差し伸べたのです。その手が空中で何かを掴んだ
かに見えた後、するするすると、細い体が空へ昇っていきました。
はじめはためらいがちだったものが、次第に流れを掴み、ある瞬間
に突然勢いを得て、ひょーいと飛び上がります。あつという間に、
お兄さんは空の高いところを飛ぶ鳥の影のようになってしまいまし
た。

糸だ。

だらしない顔のまま、鳥になったお兄さんを見上げて、私は思いました。

あのお兄さんこそ、白い雨雲から世界で一番細い糸を縊り上げる、糸紡ぎに違いありません。彼はあらゆる糸を紡いだので、あらゆる糸のことをよく知っていて、それらを自由にたぐり寄せてどこまでも行くことができるのです。

その日お兄さんは、住宅地の上空をひらりひらりと渡って、巨大な壁のような総合病院の建物の向こうに消えていきました。私はその姿が完全に見えなくなるまで、ぽかんとしたまま見送りました。階段の踊り場の窓から、自分の家の前で棒立ちに立っている娘を発見して、母が声をかけました。何やってるの、かな、そんなところで私は意味もなく、はあい、と返事をし、家に入りました。また濡れて帰って、と言いながら、母は上りかかった階段を下りてきて、一番にランドセルを拭きました。革は濡らしておいたらいけないというのが、母の教えです。

おやつを食べる時にも、晩ご飯の間にも、私は学校で起きたことだけを、父と母におもしろおかしく話しました。雨の日の楽しみが私だけのものであるように、お兄さんのことも、自分の胸の中だけにとっておきたいと思ったのです。

青い春、黒い雲

彼女が最近、妙なことを言う。

彼女と言うのはつまりそういう意味の彼女であり、しかし正確に言うとそのいう意味の彼女ではない。要するに俺は、だから、結局のところ……一度ふられた。だがそれは、俺の魅力が彼女の理想に届かなかったからとか、眼中になかったとか仲いいふりして実はむしろ毛虫のように嫌われてたとか、そういうわけじゃないんだ。彼女は（これはそういう彼女ではなく、単なる三人称だ）俺のつとめてさりげない一世一代の告白に対し、まず五秒ほど真顔で沈黙した。次にしまったという様相で右斜め三十度下に真ん丸い黒目を流し、それもまたしまったというふうにすぐ俺を見た。最後に、なんとも器用に耳たぶだけを真つ赤にして、逃げた。いつもはきはきして生徒会の会議なんか仕切ったりもする彼女（三人称な）らしからぬ、極度の上がり症とどもりを併発して満員御礼の劇団四季舞台上にでも上げられたかのようなもごもご声で、ごめ、と言い残したのが辛うじて聞こえた。辛うじてしか聞こえなかったので、俺はその後三時間ばかり、現実を拒否した。

その夜、俺が高校に上がって以来の一年と半年の間で最多の涙とその他の分泌物とに濡れたのは、無理もないことだ。

そう思うよな。思ってるだろ。告白に対して「ごめん」とダツシユの合わせ技はそりゃ、ノーだよな？

ま……実際ノーだったわけなんだが。

次の日事態は悪化した。

「真壁さん」

昨日まで「一和」^{いちかず}って呼ばれてた好きな女に名字呼びされる哀愁。しかも「さん」づけ。

「購買行こ」

その割りに用事はフランク。

まだ周囲に俺の玉砕が知れ渡っていない（と俺が幸せに信じこんでいた）時だったから、俺は何食わぬ顔でおうと言ひ、鞆から財布だけを抜いて席を立った。

午前最後の授業終了直後の廊下には、弁当片手に委員会へ急ぐ集団、朝練から着替えていないに違いない汚いかつこで昼練に向かう運動部員、午後を空けてて颯爽と帰宅するやつまでいて、生徒たちが縦横無尽に動き回っている。二階分階段を降りて、生物部のやつらの聖地と恐れられて一般生徒のあまり寄り付かない方向へ曲がる。昼休みの頭にだけは、そちらに行列ができる。購買部があるからだ。うっかり購買部入り口を越えて奥へ踏み込もうものなら、ハエや魚類や奇妙な爬虫類との蜜月に余念のない白衣の亡霊の餌食……いや、生命の神秘を探ろうとする彼らの学徒としての志には深い感銘を受けると言わざるを得ないものの、一般生徒が彼らを避けて通ることにもまた理解を示さざるを得ない。やつらは人類との蜜月に飢えている。ありていに、慢性的な部員不足なのだ。近づく者は別け隔てなく入部希望者としてもてなすからいけない。そのもてなし方がもつといけない。理系に分別される特性の中でも一般受けしない部分だけを抽出して徹底的に遠心分離して得た沈殿のごとしだ。こんな例え方をしてしまう俺だって実は理系なわけだが、やつらと同一視されるのは看過しかねる。人間十七にもなったら、文理に関わらず、相手の心の機微には敏感でいなければならぬ。そうだろう。ほどのどの行列の後、彼女（三人称）はメロンパンを、俺はソースカツサンドとハツシウドポテトと二個入りのおにぎりパックを購入した。うちの購買のおにぎりパックは、食べてみるまで中身が何か分からない。粋なものである。

袋をさげてぶらぶら外へ出ると、西の空だけが異様に真つ暗になっていた。あの下は絶対大雨になっていると確信させるだけの、真つ黒い雲だ。背後の真昼の青空とその黒とが同じ一枚の空だとは、なかなか信じがたい。

天気は西から東に移るから、あの黒雲もその内こつちへ来るんだ

ろうな……なんて言うのと百パーセント「うわ、理系」と引かれるから、思うに止める。

「私ね、考えたの」

人目につかないせいで逆に”そういう”スポットとして有名になってしまった、体育倉庫裏。数々の恥ずかしい名場面と青春の分泌物を見てきたに違いないでっかい銀杏の木の下で、その話は始まった。最初のひと言だけで、俺はソースカツサンドの命ソースカツを取り落とした。平常心なんざくそくらえだ。ちっ。

「昨日の……その……アレね？ 真壁さんは一年の時から友だちだし、一番いろいろ、一緒に遊んだりした仲間のひとりだし、よくよく考えてみたら、そういう対象として見たこと、全然、さっぱり、まったく、いーっさい、なかったんだよね」

否定語を伴う副詞のオンパレードは、三人称彼女の場合、ほんとはなんの意図もない。その後に続ける言葉に真実味を持たせたい時の、前置きを強くする癖だ。俺は決して傷ついたりしなかった。ソースキャベツサンドをひと口に頬張りつつ、紳士的に受け流した。そうに決まってる。

「だからさ。急に言われても、返事に困っちゃったって言うか。でも思い返せば、あれは、きっぱり断ったに等しい行為であつたなあ、などと、反省したり、いたしましたので」

ああ。この気恥ずかしさを紛らわす時の妙な丁寧語がたまらん。俺だけか。なぜだ。

「謹んで謝罪の意を表明いたしますとともに、試用期間を設けたいと存じますが、いかがでしょ」

つばなポイントにこっそり身もだえていた俺は、途端に指先に変な力をこめ、ハッシュドポテトをもろっと折った。石灰で白くなつた地面の上でソースカツと半分重なつて、角張った茶色いハート型みたいなのができた。

この女はいったい何をのたまうか。俺の耳は四時限目の物理の高崎の大声にやられて機能停止に陥っていたのか。中間試験を前にし

て、生徒会役員のくせして壊滅的な成績を誇る彼女の頭の中でとうとう何かが瓦解したと言うのか。

「一ヶ月くらい、真壁さんのこと、そういう目で見てみる努力をね、いたしますので。そんなふうに見えてきたら、素質はあったてことだし、いつまでたっても見えてきそうもなかった場合は、まあ、そこはかとなく、通知いたします。はい」

その発言の語尾が消え入らない内に、まるで政治家のとても失言を慌てて訂正しに走る秘書たちのように黒い雲が多いかぶさってきて、冗談みたいに突然、大雨になった。盛夏の銀杏の大木も役には立たなくて、俺たちは無言のまま、一番近いところから校舎へ駆け込んだ。駆け込んだ時にはもう、雨足は弱まっていた。そう言や、結局なんだったのか両方とも覚えていない。おにぎりの具。

つつか俺、あれいつ喰ったんだろうか。

……。

すまん。思い出したらまためちやくちや疲れた。おにぎりのことじゃなくて、あの一連のできごとのことだ。

まあそんなこんなをきっかけにいろいろあり、二〇一〇年九月六日現在、遊喜^{ゆっき}よしみは俺の彼女だ。この彼女はシーではなくてガールフレンドのことだ。ただし、前述の事情により、最後にカツコ飯がつくんだが。

俺が聞いてほしかったのは、その彼女カツコ飯の挙動不審についてだったんだけど……疲れたからもういいや。俺はこれから、この胃痛、眼精疲労および偏頭痛と軽度の躁鬱^{そううつ}症状についておじさんに相談に行ってくる。遊喜が最近、俺がさす傘の上に女の子が見えるなんぞとほざく話は、またの機会にしようじゃないか。

にしても、遊喜って、ほんと幸せな名字だな。鬱状態時に言うのがつんとくるわ。

新種発見！

遊浜市立遊浜高等学校は、閑静な住宅街の真ん中にある。古くて低くて乗り越え放題の校門の脇に真新しい守衛さん詰所が建って、昨今のセキュリティ意識の向上に対応してる感を頑張ってる。賢い高校生はあんなのあてにせず、自分の身は自分で守ると思う。

ちなみに、知らない人のために言つとくと、遊ぶに浜って書いて”ゆとりはま”。僕も高校に入るタイミングで県外から引越してきた新参者で、自分の新しい住所が読めなくて困った。漢和辞典まで引つ張りだしたけど、遊ぶって字に”ゆとり”なんて読みはない。固有名詞って自由だよな。

そんな遊浜の市立高校は、中身もけっこう自由だ。

「そいつを捕えるおおっ」

状況説明完全省略で突然そんな命令を下されることも、まあある。いやいや、あつたらたまないよ。完全に異常事態だよ。

購買部の前だった。『CLOSE』の札を下げた購買部の扉に突き当たってから右手に行くと、五、六時限目の僕らの戦場、化学実験室がある。右手に曲がった瞬間に背後からそんな絶叫をぶつけられて、僕と数人のクラスメイトは、固まった。

「どけえええっ！」

叫びながらこっちに走ってきているのは、ぼさぼさ頭の男子だった。そんなに遠くからではなかったたので、このままじゃぶつかると思った時には、もうぶつかってた。人と顔面からぶつかると、あんなないよね。貴重な経験だったよ。ぶつかった瞬間、ものすごいスローモーションの画像についてる音みたいな、わんわん響く鐘の音が聞こえた。

気付いたら、僕は購買前の冷たい床の上に仰向けで転がってた。居合わせたクラスメイトが真上から覗きこんでた。鼻の奥が、ずー

んって重くて、そこに大量の水分を感じた。さらーっと流れてほつぺたから耳にまで至ったそれは、もちろん鼻血。その時、僕は十五年ちよつとの人生史上最大の出血量を記録した。

「あーあー」

静まり返った正面衝突の現場に、のほほんとした声が割り込んだのは、僕がやつと鼻を押さえて上半身を起こした時だった。自分のポケットを探るより先に、ひょいっと鼻先にポケットティッシュが差し出された。有名なコンタクトレンズの宣伝入りだった。

「派手にいったねー」

そこにいたのは、見たことのない男だった。男って言うのも変だけど、実際、先生だと思ったんだ。体育着じゃないジャージとＴシヤツだったし、何より外見がとんでもなく大人びてたから。

「それ、全部使っちゃって」

その人はそう言っ僕にティッシュを押し付けると、僕とぶつかったばさばさ少年の方に歩み寄った。ありがたくじゃんじゃん使わせてもらいながらそつちを見ると、その人は、まだ床で伸びていたばさばさ少年の脇腹を上履きの先で蹴っ飛ばしてる。むおーん、という意味不明の呻き声とともに、ばさばさ少年は目覚めた。

「廊下は走らない、大声出さない、初対面の人間には丁寧な言葉で喋る」

意識が戻ってるのかどうか微妙な表情のばさばさに、呪文のようにそんなことを言う。

「これくらいも守れないようじゃあ、一般生徒に馴染むのはほど遠いよー？ て、聞いてんのかよ」

「……はっ」

「は、じゃねーよ。ほら、正気になったんなら謝れ」

「それどころじゃないんすよアマサワセンパイ！」

ばさばさが僕とは反対の鼻の穴から血を流しながら、その人にそう言っって食いだった。それで、その人が先生じゃなくて上級生だっということが分かったんだけど……正直、ない。どう見ても高校生じ

やない。て言うか、日本男児じゃない。

イケメンって言うのはイケてるメンズだかイケてる面だか知らないけど、だいたい顔の良さを言うもの。でもほんとの迫力って顔の造作よりスタイルで決まると僕は思う。クラスメイトたちより頭ふたつ分も高い身長とバランスの取れた手足、思わず「ちっさ！」って言っちゃいたくなる小さい頭。顔自体はそんなにくつきりもしてなくて、しよゆに分類して差し支えないと思うんだけど、驚異的な頭身のせいで和風美人的な上品さを醸してしまってる。

早生まれのせいもあって常に周りより遅れて成長してきた僕の、長身への憧れは年季ものだ。どう考えても絶対安静なのに、血圧上がったよ。

「だからそりやお前の幻覚だったの」

アマサワ先輩は雑にしゃがみこんで、後輩のぼさぼさ頭をいなしてる。ぼさぼさがいったい何を主張したのかは聞いてなかった。どうでもいいし。

「あー、ごめんね、その人」

当人が意地でも謝らないと見て、アマサワ先輩はしゃがんだまま首だけ方向転換し、ぺこんと頭を下げた。

「俺、こいつの部活の先輩だから。よく言っとくから許してやって……」

「何してる、そこ！」

アマサワ先輩の、美的シルエツトに優雅な微笑みを乗せての模範的な台詞は、化学の粕谷先生の怒声に遮られた。どうも、衝突の効果音だと思ったあれは、五時限目の本鈴だったみたいね。

「さっさと入りなさい！　いつまで義務教育気分にいるの！」

それは高校一年生を叱咤する常套句だったけど、僕らを萎縮させるにはじゅうぶんだった。あの先生、普段の口調もテストの採点も容赦ないんだよね。

僕を取り囲んでたのがわらわらと撤退して、化学実験室へ向かう。鼻血が落ち着いたのを確かめてから、僕は教科書やノートを手放し

ているのに気付いた。誰かが拾っておいてくれたらしい、床の上に几帳面にそろえてあった化学セットを慌てて引き寄せ、もう一度振り返る。ぼさぼさは放置としても、アマサワ先輩にはひと言くらい、何か言わなくちゃと思ったから。

そして僕は、衝突の後遺症を疑った。

アマサワ先輩はこちらに半分背中を向けてた。その背中を、Ｔシヤツの布を全力で握りしめてよじよじと登ってく、ちっちゃな人がいたんだよ！

白っぽい、髪の高い男の子みたいだった。顔は見えなかったけど、それが首筋にたどり着くと、アマサワ先輩は片手でうなじを梳くふりで、明らかにその小人を急かした。小人はつつつかれて、ぴゃつと先輩の襟中へ消えた。

視線に気付いたんだろうか、直後、アマサワ先輩は一瞬だけこつちを見た。僕はぎくつとしたよ。その目が、さっきまでののほほんとした空気とはほど遠かったから。すぐになんでもないふりして、ぼさぼさ頭の髪をますますぼさぼさにかき回しながら立ち上がったけど、そうやってぼさぼさくんの視線をよそに向けておいて、アマサワ先輩はそつと、もう片方の手の人差し指を唇につけたんだ。しー。

秘密、てわけ。

「じゃ」

ころつと元の雰囲気に戻って、先輩は申し訳なさそうにまた首を折った。

「ほんとごめんね。見たとこ元気そうだけど、頭とか打つてるとやばいから。何か変なことあったらすぐ保健室に行つて」

……変なものなら、たつた今見ましたけど。

そうも言えずに、僕はお礼を言つてその場を離れた。いい加減、粕谷先生の忍耐も限界つて感じだったし。

先輩とぼさぼさくんは、化学実験室とは反対の方向に消えていった。ガラスの瓶とか虫の標本でいっぱい棚が立ち並ぶその奥は、

何かと噂の生物部の部室なんだって、後で知った。

傘の端隠し

家の最寄り駅に着いた頃には、すっかり本降りになっていた。

「みーえ！ 何やってんだよ、早くしろ」

改札を出た所で、あまりの降りように見とれていた美枝^{みえ}を、ぼくは怒った声で呼んだ。

「でもよっちゃん、傘持ってこなかったよ」

我に返った美枝が、濃い眉毛をきゅつと寄せる。ぼくらがよくやっている、ランドセルを頭に乗せての全力疾走を、美枝は嫌う。

「こっからもらえばいいんだよ」

切符を買う所の脇に、色も長さもちぐはぐな傘を何本かさされた、小さな傘立てがある。ぼくはそこから、短いビニール傘を一本、勝手に取り出した。

「ああ、いけないんだあ」

「これはそういうもんなの！」

残りの傘を指して、ぼくは怒鳴った。

「ほら、早く選べよ。始まっちまうだろ」

「ほんとにいいの？」

「いいの！」

なんだってこいつは、こうとろくさいんだろう。ぼくは水曜日は全速力で帰らなきゃいけないのに。でないと毎週欠かさず見ているアニメを見損なう。

なんだか納得いかない顔をしつつも、美枝は大人しく、明るい水色の小さな傘を選び出した。西口階段を駆け下り、傘を開く。美枝が続いて開いてみると、そこには青い大きな水玉が散っていた。

「ちえ、かわいいの」

「かわいいの、いいじゃん！」

ぼくらは小突き合いながらにわか**に**強まった雨の中に飛び出した。すごい猛暑の日だったから、空の上もさぞ熱いんだろう。飛び散っ

てむき出しの腕に当たる雨粒が、なんだか温^{ぬる}い。

「とばすぞ！」

「結局走るんだあ！」

豪雨に紛れて、お互いの声も、足音も見er間に^間にかき消える。

不思議と明るくて、これは本当は晴れてるんじゃないかと、見上げた途端に空全体がぴかっと光る。理科の時間に習った時からくせで、ぼくは走りながらも、いち、にい、さん、と心の中で数えてしまう。四秒、雷鳴が轟く。夕立に特有の、高いのか低いのか分からないけれどもとにかく激しい音だ。壁も屋根もブリキでできた巨人の家を、巨大な重機で一気にめちやくちやに潰す音。うしろで美枝が、悲鳴とも笑い声ともつかないでたらめな声を上げている。

細い道路のおもてで水滴が次々にぶちまけられて、とても薄いレースを何枚も何枚も重ねられたみたいに、アスファルトが白く膨らんでいる。温水の水がそのまま霧になつて空気全体を濡らすので、辺り一面むわつと暑く、まるで自分もアスファルトと一緒に膨らんでいるみたいに感じる。ぼおうと膨らんだ世界にかつと光が差すたびに、いくつもいくつもブリキの家が建てられて、そのすべてが徹底的に、ぱらぱらのちりになるまでに潰されていく。そのちりになったブリキを、誰かが天からばらまいてるんじゃないだろうか、雨と地球のぶつかる音は固くて、物騒に大きい。うすら汚れたビニール傘に、今にも穴があきそうだ。

ぱんぱんの世界をかき分けて走り抜け、最後の四つ角を曲がると長い緩やかな坂になる。両側は住宅だ。最近になつて建てかえられた建物のパステルカラーと、昔ながらの民家の土気色が平気で隣りあっている。さわがしく飛び回る雨の粒にもぼくらにも知らんぷりの、ぼかんとした町並みの間を転がり落ちるみたいにして駆け下りる。

半分くらい下ったところで、世界が急に、すうつとしぼんだ。

誰かが脇から大急ぎで巻き取っていくかのように、足許の白いレースが引いていく。空の上ではブリキがすっかり底をついたらしい。

雨粒は、大きさはかりそのまま、唐突に数を減らす。今度辺りが光ったのは、雷ではなくて、本物の日差しのせいだった。ぼくは傘を持った手を大きく挙げ、夕立が走り去ったのを確かめた。つむじにひとつ、小人のげんこつみたいな雨が落ちて、頭の皮に染み渡った。

「すげえ！」

坂で勢いづいた足を止めないままで、ぼくは叫ぶ。

「嘘つき雨だ！」

雲も空も水も、レースの絨毯を敷いた誰かもブリキの家を建てては壊していた巨人も、みんなして嘘をついたのだ。雨なんて本当には降っていなかったのだ。そんなふうに思えるくらい、あつという間に太陽がすべてを舐めて、きれいに晴らしてしまった。隣の家がびっしり並べているプランターの緑の葉っぱや、つるりとした茶色い屋根瓦、コンクリートのブロック塀、スタンドも下ろさないまま立てかけてある真つ赤な自転車金属が、したんしたんとしたたる水できらきら輝いて、夕方のはずなのに朝めいて見えるので、見慣れたはずの風景が余計に現実味を欠いていく。この世の始まりにひとりきりで生えてきた気分になって、吸いこんだ空気を全部音に変えるような大声を上げた。声はすかと突き抜けた青空に吸い込まれた。

それでぼくは、駅を出てから初めて、足を止めた。

振り返って、おもちゃの国みたいにぴかぴか光る住宅地の坂道を見渡す。ぼくはそれを、だつと駆け上がった。膨らんでいた間は気にならなかった靴下や靴の中の水が、しぼんだ世界ではいちいち気になる。じょぶじょぶ言う音は汚らしいし、足指の間を這い回るこまかな泡ぶくはくすぐりたいより気持ちが悪い。けれどぼくは、一度も止まらずに長い坂を登りきった。さつき曲がったばかりの角を、駅の方角に曲がる。途端、目の中に鮮やかな青の水玉模様が飛びこんだ。

水色に青の水玉が散った傘が、開いたまま、地面にころんと転が

った。

全力で駆けつたのに、少しも息切れしなかった。ぴったり閉じた唇をへの形にして、最後の敵を睨むアニメのヒーローみたいに傘の持ち手を睨みつけた。上を向いてしまった傘の中にはひとすくいの水が溜まって、表面が銀色にてかっていた。偽物になってしまった世界の中で、その青と銀色だけ、くつきりと本当だった。

遠くの上の方から、すべての小道具と舞台とを片付けた荷車を引くような、重たい音がする。

鏡の中にも迷いこんだのかも知れないと疑ってしまいうくらい、誰もいなかった。夏のひと時を横取りしていたよそ者がいなくなつたのに今さら気付き、そこらじゅうのセミたちがいつせいに腹を震わせる。それを合図に、鏡がひっくり返った。ぼくのいつもの街の中で、青い水玉模様の傘だけが噓っぱちになった。

幻灯オアーゼ

『オアーゼ』は、今時珍しい、昭和初期の香り漂う飴色のバーである。オナーがぼくの所属していた部活動のふるういOBで、その関係で部活関連の集まりというところに集合させられた。古き良き体育会の伝統を守ることが、そのOB（当時四十九）の道楽みたいなもののように、現役はその店ではどれだけ飲み食いしようと無料であった。むしろ、先輩の前で財布を見せることは失礼とさえ言われたものだ。

まだまだ肌寒さの強い、春先の日だった。ぼくはその夜も、遊浜駅南口から徒歩でバー『オアーゼ』を目指していた。当時大学二回生。九回も上の先輩のご結婚を祝うための集会であった。その先輩はとくに社会人だったが、OBを呼び集めての試合や現役交えての同窓会など、イベントへの出席率が高い方で、ぼくらもだいたい面識があった。一年坊どもが確か、その時初対面だっただろうか。それは瑣末な問題である。

さて、一回生のみぎりから剣道……やりたくて入部したのだから、もちろん……のみならず行事ことやコンパ系にも真面目に参加する優等部員であったのだが、『オアーゼ』でのコンパだけは少々億劫だった。なぜかという、あの店が屋気楼だからだ。仲間と連れ立って行くときはまったく問題なく辿り着く。ひとりになるといけない。確かにそこにあるはずなのに、ぼくひとりの時には決して姿を見せないのである。不思議なものだ。

そういうわけで、毎度なんとかして誰かと一緒に行くことを画策していたのであるが、その夜は直前までバイトを入れてしまっていたため、そもそも予定到着時刻が他の面々より遅れていた。公認遅刻だ。十九時に駅の反対側のコンビニでバイトを終え、南口に回り、記憶をたどって『オアーゼ』を探す。空は真っ黒で、立ち並ぶ飲み屋やパチンコ屋、ゲームセンター、健康ランド的な施設にドラッグ

ストアなんかの灯りが眩しい。黒服の怪し過ぎるお兄さん方が、横断歩道の車止めに座って煙草を吸っている。駅北側は住宅地だが、南側はちよつとさびれかかった繁華街だ。大学入学以来丸一年、馴染んだその街を……徒歩十分のはずなのに……ぼくはやはり二十時近くまで彷徨った。最終的に、コンパの真つ最中であるう同輩に電話を入れて、途中まで迎えに来てもらった。ぼくは現れた店を見て、「ここはさつき三回は往復した。絶対に通った」とひとり拳を震わした。夜の繁華街には魔物がいると思う。やつらは得物を陥れるために、毎夜街の様相を複雑怪奇に作り替えている。

そんな魔物どもの餌食になったぼくは、結果非常に目立つ形の登場を余儀なくされたわけである。考えても見て欲しい。体育会離れのはしりであつたぼくらの代は、とかく少人数、ぼくの同期などひとりしかいなかった。二十名近いOBの方々の中であつて、現役は目立つ。出たり入ったりも衆目監視を免れない。

当然の帰結として、ぼくは主役の先輩とその嫁さんらしい女性の隣に引き出され、駆けつけ一杯を皮切りに相当呑まされるはめになったわけである。ぼくは春生まれなので、ぎりぎりの二十歳であつた。

「コンビニかあ」

めでたくご結婚された九回上の先輩……真壁一斉先輩は、ぼくの遅刻の理由にそんな感想を述べながらウヰスキーを舐めた。

「そう言えば、一斉先輩も学生時代あそこでバイトされてたって聞いたことがあります」

ぼくもシングルのグラスを揺らしつつ、そう返した。畏まった場面ではフルネームに先輩づけで呼ばなければならなかったが、一斉先輩はフランクな方であるし、だいたいの者が普段は名前呼びしていた。酒が入ると「一斉さん」と呼ぶ者さえあつた。

「混ぜ方がなつてないね」一斉先輩は唇を舐めてさらりと苦言を呈し、「なつかしいなあ、もう十年近くも前になる」

「すみません、すぐ指導して参ります」

新入部員たちの水割りの作り方に喝を入れようとぼくが立ち上るのを、一斉先輩は軽く止めた。正直、ぼくのシングルもシングルとは思えない濃厚さであったので……実際、一本指シングルを縦に使ったのではないかと疑った……その文句を言いたくもあつたのだが、当の先輩に止められては座りなおす他ない。

「指導は後でするもの。お前はこいつを取り替えるのが正しい」

その割にさらりとぼくの行動を正され、後輩の不得手で異様に濃厚になった水割りによるぼくの酔いは、一瞬覚めた。一斉先輩はフランクだが、言うことはおっしゃる。嫁さんらしい女性が、隣で面映そうにした。

「ま、今はいいけどね」

奥ゆかしい美人に見入っていたら、謝罪する前に先手を打たれてしまう。

「人も減つたしなあ。下の指導も大変だろ。俺の同期なんか二十三人もいて、しかもほとんど下宿組でさあ。あそこのバイトの八割がうちの大学だったんだけど、その半分以上が剣道部だね。笑っちゃったよ」

後輩に重ねてみずからも失態を演じ、しかも言い訳まで用意していただいてしまったぼくは、先輩が滔々と語る思い出話や嫁さんをお交えての職場の話題なんかに、心からの笑顔で応じるしかなかった。いつの間にやら、ぼく、一斉先輩、その嫁さんの三人で一組のようにされており、他の者は銘々で、酒を作ったり料理を運んだり別のOBと談笑のグループを作ったりしていた。もつとも顔売るべき一回生を差し置いてぼくが主役を独占するのはどうなのか、という思考も頭をかすめたが、一斉先輩の話が途切れない。酒豪の先輩に触発されるようにウヰスキーをあおり……『オアーゼ』は飴色であるがゆえ、ウヰスキーが麦酒しかない……酔いが回って部活の秩序について考えるのも徐々に面倒になる。ちなみに、ぼくはアセトアルデヒドには勝てない体質である。が、『オアーゼ』はまともに払えばけっこうな額になる店であるがゆえ、酒の質が良く、いちいち

が旨いのだ。判断力の低下に伴い、ぼくは先輩の話をBGMのように聞き流しながらウヰスキーを呑みまくる。次々と呑む。浴びるように呑む。あんまり浴びるように呑んだので、先輩が身を守るべく傘をさした。酒を浴びるといふのは周囲に迷惑をかける行為である。

「……先輩」

「ん」

が、その時のぼくには、周囲を気遣う余裕はとうになく。

「自分、だいぶ酔ってるようです」

そのくせ、酔っぱらいの自覚をするだけの理性はあった。いや、自覚せざるを得なかった。

「分かってんならよかったよ。お前強くないんだから、そんながぶ呑みしちゃ。だいたいな、ウヰスキーってのはそう……」

「いえ」

ウヰスキーの正しい嗜み方を教授しようとする先輩の言を畏れ多くも遮り、ぼくは一斉先輩の紺色の傘の上空をうつろに指差した。

「先輩の傘の上に、世にもかわいらしい女子が見えます……」

「……浜中」

嫁さんがきよとし、一斉先輩は一瞬の内に哀れみに溢れた眼まなこでぼくを見た。酒の魔力からぼくを守るように、傘をさしかける。

「いや、分かる。分かるよ。うちの部には女子部がない。マネージヤーも応募がなくなつて久しい。それでも入部してくれて、二回生になつても続けてくれるお前を、卒業生として頼もしく思う。また同じ境遇にあつた者として、女日照りの生活の内にそうゆう妄想に耽ることを、俺には止められない」

先輩は嫁さんを気にするふうの小声で、熱のある弁をふるつ。

「けどな。そうゆうのは部屋でひとりでこっそりやれ」

「ちがいます……」

部屋でひとりでこっそりすべきことは言われずともやっている。そうではなくて、本当に見えたのだ。男物の色気のない傘の上、ちよこんと正座をして悲しげにこちらを見る少女の姿が。ランドセル

を背負い、水色の夏物のワンピースを着た、もの言わぬ少女の姿が。
「遠藤！」

見える、見える、とトランス状態の霊媒師のように主張する酔っぱらいを前に、一斉先輩の決断は速かった。下宿が同じであったがために酔ったぼくの面倒をいつも見るはめになっていた、ある三回生の先輩を呼びつけたのだ。

「こいつ、いつにも増して酔ってるから。よろしく頼む」

優秀な猟犬のスピードで傍らにやってきた遠藤先輩に、一斉先輩の指示が飛ぶ。

「違っんです。遠藤先輩、見てください、ほら、そこに」

目の前の光景があまりにも突飛に過ぎ、ぼくは必死で少女の存在を主張し続けた。が、大先輩の手前、現役の全責任を負う三回生という立場にあった遠藤先輩は、

「ばかなこと言って先輩方を困らすな。いったいどれだけ呑んだんだ？ 真壁一斉先輩、申し訳ありませんでした、確かにお預かりしましたから。さ、来い浜中っ」

大袈裟に迷惑そうな表情を作り、ぼくを捕まえて上座から引き離れた。しかも、傘をさされた。

よくよく見ていれば、席の間を引きずられるようにしてぼくが移動すること、周囲の人々が酒気を避けるべく傘をさす。しまいにはバーのマスターであるワカコさん（当時三十四）までが番傘みたいな古めかしい傘を取り出した。室内で万人が傘をさし、何食わぬ顔で酒席を楽しんでいるのは、酔った頭にとっても大変不可解であった。ぼくはその段になってようやく自認した。いつもとは違うが、自分が過去最高に泥酔しているのだということを。酔っている自覚すなわち意識があるから泥酔もなにもないのだが、あんなくつきりとした幻覚を見たのはあれが初めて最後なのだから、酔っぱらいレベルとして最高に達していたのは間違いあるまい。

自己の状態に奇妙に納得し、ワカコさんの面白そうな視線を受けながら外へと連れ出されるまで、ぼくはしつこく現れる幻覚を見続

けていた。酒精のまったく似合わないワンピース姿の女子児童は、満場の傘の上をぴよこぴよこと渡り歩き、真っ赤なランドセルの食い込んだ肩越しにぼくに一瞥をくれた。口が動いたが、声は聞こえなかった。

子どもらしい動作とは裏腹に、終始、悲しそうな顔。

幻覚ならもう少し夢のあるものを映せばいいものを、これだからぼくという人間は面白くない。

結局、翌日には部活の全員からからかわれ、主将からは先輩方の前で前後不覚になったことについて軽く叱られ、唯一の同期である男から「ロリコン」の二つ名を授けられて、この件は幕を閉じた。

卒業後十年以上も経った今、なぜ『オアーゼ』のことなど思い返したかと言えば、最近、一斉先輩と再会を果たしてしまったからである。今月一日づけで地方の病院からゆとりはま総合病院に栄転となったところ、その精神科に先輩が所属していた。都市部を離れているとそうした人間関係図にすっかり疎くなるもので、まったく知らなかった。

当然、慌てて挨拶に行き、

「おー、ロリコン」

と迎え入れられたわけだ。

一斉先輩は昔とまったく変わらず、つかみ所のない所作の内にならず、バリと核心を突く、ある意味一番恐ろしい存在であった。他の医師たちからの評価もおおよそ同様であるようだ。科違いとは言えこれからどのような仕打ち……もとい、お引き回しを受けることやら、想像もつかない。

嵐の後の浜辺の朝

私のふるさとは、地名に「浜」とついているくせに海も湖もありませんでした。

だから私が海を好きになったのは、大人になって海辺に暮らすようになってからです。大人になるというのは、自分で自分を養い、好きなところに暮らして好きなことをできるようになることであり、その結果起こることについて全部の責任を負うということです。私は責任を負うのはいやなので、ひっそりと誰にも迷惑をかけないようにして暮らすことを選びました。そのために、夢とも呼べないようなささやかな願望のいくつかを諦めてきましたが……ここだけは譲れなかったのです。海辺の街で暮らすということだけは。

海を好きになるより前のことなのに、不思議なものです。

ひとり海辺に近いアパートに暮らす私は、気が向くと浜辺に散歩に行きました。夏場は海水浴場になってしまうようなビーチではなくて、小さくて、汚くて、裸足で歩くとガラスを踏んでしまうような、誰も来ない浜です。すぐそこに国道が通っていますが車は滅多に通らず、風よけの松も手入れされずにぐにやぐにやに曲がっています。私は、海が好きなのか、誰もいないその空間が好きなのか、時々考えてみますが、どちらでもいいことだと思っただけ考えるのをやめるのでした。私が好きなのは、私の街の、誰にも顧みられないこの砂浜なのです。

気が向いた以外にも、必ずそこへ足が向く日がありました。嵐が来た次の日です。

嵐が来ると辺りが雨のにおいに包まれて、さっぱり清々しくなります。早朝、特に秋の朝などは最高です。

そして、小さな私の浜辺には、様々なものが届けられているのです。

新しい砂や、石や、地上では見た事もないような不思議な形の流

木が届いています。外国語のパッケージ、ペットボトル、ビニール袋なども届いています。わかめの絡まった小舟の残骸があることもあります。私は、それらがまるで私に向かって送られたプレゼントのように感じるので、嵐の翌日には必ず、それらを受け取りに向かったのです。

今まで届いたプレゼントの中で、私が唯一、家に持ち帰ってとっておいているものがあります。

それは美しい秋のはじめで、嵐は明け方に去り、まさに絶好のシチュエーションでした。生々しい雨のおいと、正反対のような乾いた空気を持つてくる風。肌寒い朝の、さっぱりした風景。自分以外誰もいない、別の場所に迷いこんだような楽しい気分です。

その日、浜辺に届いていたのは、ひとつのガラス瓶です。

私は初めて、贈り物を拾い上げました。それは嵐が気まぐれに持ってきたものではなく、確かに存在する自分以外の誰かの意志でここに届いたものだったからです。

それは見慣れた調味料の空き瓶だったので、ひと目で同じ国の誰かのものだと分かりました。その中に丸めて入れてあった一枚の紙には、やっぱり私の一番良く知った文字が綴られていました。そうです。それは誰かから誰かへの、手紙だったのです。

私はそれを、そっと家に持ち帰りました。それっきり、あの浜辺には行かなくなりました。海を大好きになった後のことなのに、不思議なものです。

手紙の文字は、整っていましたが個性的で、読みづらいことはまったくありませんが何かを歪めて伝えてくるような、相手の顔の見えるように見えない文字でした。

文字は訴えていました。

私はそれに対して、何も言い返すことができません。だって相手が自分の名前さえ書いてくれなかったのですから。ただ自分の胸の中ですら思っただけです。この手紙を書いた人はきつと、まだ幼いのだろうな、と。

私に言っただってどうしようもないじゃない、と。

だいいち、意味が分からないわ、と。

私が海辺を好きだったのは、やっぱり誰もいない静寂を好んだからだったのでしょうか。そこに他の誰かの手紙が紛れ込んだから、もう好きでなくなったのでしょうか。時々考えてみますが、どちらでもいいことだと思って考えるのをやめるのでした。

誰かに言いたいんだけど、相手を自分で決められるほどぼくは偉くない。誰かに言うべきなのかどうかはそもそも判断できません。だから海にお願いします。海が誰かのところへこれを運んだんだったら、言うべきだったんだということにします。

ぼくはこれから家出をするのですが、決して家が嫌いになつたからじゃないんです。父さんも弟も大好きだし、学校の友だちも大好きです。ただ同じように大好きな別の友だちのために、ぼくは家を出ます。でも、さようならとか、探さないでとか、言うとかえって心配されて探されてしまう気がして、言わずに出ることにしました。友だちのことが終わったら、ちゃんと帰るつもりです。

友だちのことってというのは、ぼくの雨子のことです。父さんは、ぼくと弟と父さんの三人だけの秘密だって言いますが、雨子はぼくの大事な友だちのひとりなので、秘密にされるのはおかしいと思います。秘密だからぼくは他の誰かに雨子のことを言わないし、他のみんなからみんなの雨子の話を聞いたこともないです。そんなの雨子がかわいそうです。きっと、みんなで秘密にしないで楽しく遊ぶ方法があるはずです。ぼくはそれを見つけてます。

父さんや弟にもし会ったら、ぼくは元気だと言ってください。

進路指導分室（不定期）

というようなことを、訥々訥々語る子どもだったんだそう。あ？ いえ、だから、ソーシローのお兄さんですよ。なんだか思い詰めやすそうな思考回路でしょ？ だからもう、探すだけ無駄なんじゃないかと私なんかは思ってしまうんですが…… だから失踪したんですってば。小さいころにね。

まあ弟の方は、雨子と人間の将来についてなんか悩む余地もないのほーんとした、わけの分かんない男子学生に仕上がってますから。そういう心配はないでしょうけども。

その雨沢弟、今私の目の前で深く眠ってます。ちなみに今、授業時間中なんですがね。私もいちおう、教師の末席を汚す身なんです。がね。

「寝る子は育つって格言はほんとだ」

日本の学生とは思えない長い手足を見ながら呟いてみると、

「……それ格言なの？」

フムッ
デ

籠り声でつつこみ。実験台に突っ伏してよだれまで垂らしておいて、狸寝入りだったか。

「起きてるんなら教室に戻んなさい」

「寝てるんならいいんだ」

「そういうもんでもない」

「俺三限取ってないよ」

突っ伏してよだれを垂らしたまま、もごもご言い訳してるこのでっかい男子、雨沢蒼司郎。高三。ここ生物実験室を部室とする生物部に一年生の時から在籍しておいてこれといった研究成果なし。重たくない性格と何より飛び抜けて端麗な容姿のおかげで後輩人気ダントツトップの、我が部きつての真人間です。我がつてのは、私が生物部顧問の生物教師だからです。真人間てのは、そのとおりの意味です。うちの部には何故だか、人間の歪んだやつらが集まるのが

通例でして。きちんと挨拶でき、遊びながらも留年しない程度に小
狡く単位を取り、学年クラス問わず多くの友人を持ち、人から推薦
されて生徒会の副会長に収まっちゃうような日向の学生は、普通な
ら絶対に入部したりしないですよ。泣けてきますね。

人間としては真なんでしょうが、学生としてはこのとおり決して
真面目とは言えないこいつ。何が気に入ってるんだか部室に入り浸
りの三年間を過ごしてきたんで、私にとってもなんだかいる方が普
通で、それほど強く授業参加を言い付けたりはもうしません。今日
の三、四限が三年生の数少ない必修だったことはもちろん知ってま
すが、そんなことは些細な問題ですよ。

それより重要な問題が、ソーシローにはあるんです。

「お前、いい加減進路は決めたの」

私は担任でも進路指導でもないですが、一番長く接してるに違
いないち教員として、やっぱりそこは気になります。

高校生活も残すところ半年を切り、多くの同級生が図書室に籠っ
て受験勉強をし、いくらかは就職活動をしている季節……残暑い
まだ厳しいながら日に日に過ぎやすい秋の気配強まる昨今……ソー
シローは掛け値なしに、なあんにも行動していないんですからね。
別に継ぐべき家業があるのでなし、うちは凡庸な市立校で附属も
ありません。同じ敷地内に幼稚園から高校まで並んでるんでよく勘
違いされますが、エスカレーターってわけじゃないんですよ。あしか
らず。

「うーん……」

やっぱり決めてないらしい呻き声します。伏せていた顔がふい
つと上がると、寝起きの腫れまぶたの下から異様に真っ黒な目が私
をぼーっと眺めました。こいつは腹の立つことに、美形なんですよ
ね。派手じゃないんですけど、きっちり左右対称で。まぶたが腫れ
ていようが袖のしわの跡がでにくつきり残っていようが、この顔
とスタイルを写真に撮って事務所かオーディションかに送ったら、
就職なんか速攻で決まりそうなもんです。

「ユーキせんせつてさ」

ソーシローは勝手に話題を私の方へ切り替えました。

「なんで先生になったの？」

「教育大出たから」

「なんで教育大行ったの？」

「先生になろうと思ったから」

「なんで先生になろうと思ったの？」

「さあなあ」なんにでも理由を求めるのは若者の悪い癖ですよ。

「他になりたいもいんもなかったから、勧められるままになったよう
なもんだ」

「ふうん」

ソーシローはでも、ばかじゃないんで。大人の説明で自分を納得
させるだけの技術はあると思います。

「仕事はなんでもいいよね。続けるってことが責任であって」

「どこるか、ひよつとすると大人より冷めたもんです。」

「口は一人前だね、お前」

全体、生徒会活動なんかすると下手に口八丁になっていけません
よ。中身が伴わないと。

「仕事をしてるのが社会人で、プータローは社会人じゃない」ソー
シローが寝言みたいな声で続けます。「社会の恩恵を受けたかった
らちゃんと社会人しなくちゃいけないくて、社会人しない場合は野垂
れ死んでも文句は言えない」

「そういうことは、きちんと卒業後のビジョンを示してから言えば
立派なのに」

「でもさー、野垂れ死んだら社会が後片付けをしてくれちゃうわけ
でしょ？ 俺は別に放つといってくれていいよって言っても、そうも
いかないし。夏だし。腐るし……」

「社会人しない気満々か」

「だってさー。どう考えても、俺のやりたいことは社会人じゃない
んだもの」

「お？」こりゃあ初耳ですよ。「やりたいことなんか、見つかったの」

「俺、ちっちゃいころからやりたいことはひとつよ」

「なんだよ。聞いたことないぞ」

「言ったことねーもん。誰にも」

ソーシローはのらくらして、結局やりたいことを教えちゃくれませんでした。まったくこの子は。どうしようね。

「そっぴや、先生さ」

私が教師として悶々としていたところへ、こいつはまた関係ない話頭を出してきます。

「前々から後学のために聞きたいと思ってたんだけど」

「なんだよ」

「娘にオトコが出来た父親の気持ち」

なんだそりゃ。

私には確かに娘がひとりありますが、まだまだほんの高校生で色気も何もあつたもんじゃなく、今は部活と体育祭委員会の活動に夢中です。従いましてオトコなんかできようはずもない。そんな気持ちにはむしろ、私の方が後学のために知りたい……。

「……お前」

ところがソーシローがやにニヤニヤと笑うもので、私ははたとしました。

「まさかよしみに手え出したのか」

「俺？」

疑われるなんて毫も思っていなかったようで、ソーシローちょっと面白そうに自分を差して笑います。確かに、自分が手を出しましたなんて冗談半分で父親に申告してくる男もないもんです。だいたい高校生の分際で手を出すさえないなんて、言語道断。

となると、こいつのニヤニヤはよしみに……娘に関する何かを知っているがゆえのニヤニヤだということになります。娘はこの学校の二年生です。生徒会の元副会長と、体育祭委員会の現役委員長で

すから、面識があつても不思議じゃありません。しかし、今までこいつの口から娘の話聞いたことはないように思います。いったいどういうことでしょうかね。

そういうようなことを私が問うと、

「いやー、学校じゃなくて家の方の情報網で知ったんだけどさ」

ソーシローは、知らざあ言つて聞かせようとばかり、楽しそうに言うんですよ。

「遊喜ゆうきの家の子が真壁の家の子とくつつきそうだとかなんだとか。

そーゆー家の話にいまだに敏感だよね、じいさん連中は。で俺は完全によしみと真壁いちかす一和のことだと思つたから、ちよつと見てみてたわけ。そしたら、まあ」

「なんだ。何を見たんだ」

「さすがにねー。言えねーよそんな人のプライベートなこと」

「こいつ、言うだけ言つといて！」

「やっぱ気になるんだ。娘のそーゆーことつて」

「うるさい！ いいから何を見た、こら、どこ行く！」

「四限始まるし」

「三限を取らないで四限は取つてるなんてことがあるか！」

「あるある。よくある」

ソーシローはそのまま逃げようとしたましたが、私は許しません。

教師である前に父親です。真面目に授業に出る気を起こした生徒を力技で引き止めるくらいなんですか。

「そんなに知りたいなら言わないこともないけど」

するとソーシローは、渋々といった演技を挟みつつ、

「いつこ頼み事聞いてくれる？」

久しぶりにおねだり上手の顔を見せやがりました。ばかでかい男子のくせにおねだりとはけしからんですよ。しかも上手つてどういうことですか。断れた試しのありやしない。

「……なんだ」

「遠藤の研究。ストップかけて欲しいんだよね」

「遠藤？」

私はぱつとその顔を脳裏に浮かべました。うちは人数が多くなくて、粒選りの曲者集団ですから、部員を覚えるのは割と簡単です。

ただ自由研究でそれぞれが何をしていたかとなると、若干怪しい部分も出ます。さて、我が生物部の二年生部員、毎日寝癖の激しい遠藤大介は今何をしていたか。

「ああ、あれか」

やつは今、奇妙な研究に着手していたはずです。なんでも今年の夏のはじめ、部室前の花壇で新種の生物を見かけたとかなんとかで、そいつの探索にひとり本格的に乗り出しているのです。生物部の活動は、私が手ずから解剖の手法なんかを教える時間と、それぞれ思いの研究をする時間とに分かれます。後者の間に何をしようとおおよそ自由で、別に大学の研究室でもなしさっぱり結果の期待できないお題目だろうと止めたりはしないものです。

そこを敢えて、止めて欲しいということ。

「……そういうことか」

「そーゆーこと」

どの道、一も二もありません。

「分かった。顧問の全権限を以てして止めてやる」

「ありがと。頼りにしてるよ、ユーキせんせ」

おねだり上手とはお礼上手のことです。

「で、何を見たんだ」

私はせつつきました。よしみがオトコなんて、何をしていようとと許し難い。いえ、いずれはどこかへ幸せに嫁いでもらわないと困りますが、それとこれとは話が別です。しかもよりによって真壁の一和とだなんて。いえいえ、お家問題なんて私は気にしませんけれども、ソーシローの言うとおりお年寄り方はいまだに気にしますし、やっぱり真壁だけはいけません。この雨沢のソーシローと何かあった方がまだましです。

そうしたためまぐるしい思考がきつと逐一表れていたのに違いな

私の顔を見て、ソーシローは「勉強になるなあ」と笑いました。畜生め。せいぜい勉強して、将来娘を持つてやきもきするがいい。私は教師として、持てる眼力の全てを賭して生徒の未来を呪ってやりました。

ついさっきあれだけ悶々としたこいつの半年後のことなんて、もう何も考えてはおりませんでしたよ。正直ね。

秘密のカルテ

遊浜市はほんとに小さな町で、少々変わっている。沖縄に独特の名字だとか、中居さんだらけの町とか、聞いたことがあると思うんだが、うちもきつとその類だ。百年くらい遡ったらみんな親類なんじゃないかと言われているくらいで、真壁と浜中と遠藤が異様に多い。かく言う俺だって遠藤だ。画数が多くって浜中よりは格好がつくが、地元でありふれすぎていて気に食わん。

俺に縁の深い知り合いに、やはりありふれすぎた家系のお人がいる。

真壁一斉いつさいと言って、幕末の志士みたいな名前だが実情はうすぼんやりした方だ。俺の大学の先輩にあたり、八つ離れているから同時に学生をしたことはないものの、同じ剣道部のよしみで懇意にしていただいている。現在は同じ病院に勤める医師同士である。地元が大好きな人間の多いせまつくるしい町だから、地元が一番近い大学を出ちまうと大半うちの病院に集まるように出来ていて、先輩と会うのは大して珍しいことでない。ついこの間、よその病院に行っていたひとつ下の後輩もとうとう赴任してきた。大学名が効いたんだろう。

真壁一斉先輩は精神科医である。

が、精神科医の仕事をしているのを誰も見たことがない。

今日の何科の外来は誰で回診が誰で、くらいは内部の者なら誰でも参照可能だし、外来に至っては患者向けに病院の入り口に張り出されているくらいだ。そこに真壁先輩の名が並ぶことも無論あるが、不思議なことにその時間帯には決して患者が来ない。元来精神科は予約して来るのが大勢で、いきなり外来にやってきて「どこどこが悪くて」というのは少ないらしいが、それでも百パーセント患者数ゼロというのはおかしい。それで同じ給与をもらっているのだから、推参ながらてめえちょっと待てと申し上げたいくらいなものだ。

あの人が病院で何をやっているのか、実は誰も知らないのではない。最近、院内でそんな話が持ち上がった。医師も看護師も事務連中も、そろって情報を提供しあってみる。廊下をふらふら歩いていたり、ナースセンターに入り浸ってみたり、便所で雑誌を読んだり入院患者と与太話に興じていたり、実に様々な目撃情報がある。やはり診察や治療の様子はない。

ただふたつ、おもしろいことが分かった。

ひとつは、真壁先輩にはたったひとりお得意さんがいるらしいということ。お得意さんと言ったって、正規の患者じゃない。先輩の甥っ子が血縁を笠に着て無料でカウンセリングを受けている、というのが正しいところなようだ。精神科医はカウンセラーじゃない。甥っ子がなぜ先輩を^{たの}恃んでくるのか知らないが、とりあえずやっていることは悩み相談めいたことらしい。それもひとえに、先輩に仕事がないからできるのである。勤務時間中に堂々と、病院内のいたるところで相談室は開かれる。俺は見たことがないが、看護師のおばちゃんと言うから間違いない。彼女たちほど院内を隙なく見渡している者もないもんだ。

もうひとつは、先輩がふらりとどこかへ消える時間があるということ。

これは由々しいことである。雇われ医師が勤務時間中に親戚と談話するだけで飽き足らず、誰にも行方を告げずに姿を消すとは。まことに推参ながらてめえふざけるなと襟首をお掴み申し上げたい。俺は真壁一斉という人物自体は嫌いでない。学生時代から尊敬していたし、今もって人間として敵わないと思わされることは多々あるが、この噂が真実だとすると社会人としては確実にいかん。

こういう次第で、俺は先輩の無実を証明せんと考えた。決して悪事を暴こうというベクトルではないので勘違いないように願いたい。それでまあ何をしたかと言うと、先輩の後をつけてみた。俺にも仕事はあるが、診察室から解放された時間帯にちよつと小用と言って消えるくらい雑作もない。速度オーバーした車を捕まえるには、警

察だつて百五十キロ出さないとならん。

ある日、午前いっぱい手隙となり、真壁先輩もいずれの担当にもアサインされていない、絶好の機会が訪れたので、俺は計画を実行した。真壁先輩はおおよそ噂のとおり、廊下をふらついたりナースセンターに根を張ったり便所で雑誌を読んだり入院患者と与太話に興じたりする。やっていることは下らなくても行動範囲は広大で、尾行はたいへん骨折りだった。まずもってひとつところに腰を落착ける時間が長いから、不自然にならないよう周辺に待機するのが難儀だ。

そうこうして、俺の半日はあつという間に無駄に流れ流された。午後は体が空かん。そうでなくても、さすがにこんなことに丸一日を割くには、俺の良心はまともすぎる。真壁先輩も今日明日転勤というわけでなし、気長に見張つてやるか。そう思つたところへ、ことは突然起こつた。

真壁先輩が奇妙な操作をしだすまで、俺は全然気付かなかつたんだが……そこはいつの間にか病棟の最上階だった。真壁先輩はフロアの片隅にひっそりとある一基のエレベータの前に立ち、壁に取り付けられた機械を操作していた。あれは、ここからさらに上に行く唯一のエレベータだ。

この病院の建物は七階建てで、三階までが外来、四階から六階が病棟、その上はと言うと、院長室だとか応接室だとか患者入室不要の偉い先生方のフロアになっている。真壁先輩はまさに、その偉い先生方フロアへ向かうエレベータを呼び出して、我が物顔で乗り込んでいたのである。確かあれに乗るにはパスワードが必要で、一介の医師にはそれは教えられていないはずじゃないのか。

俺は状況が飲み込めなくて、なんにもせずに先輩を見送ってしまった。一緒に乗り込むわけにもいかないし、何ができたかと言うと何も浮かばないが。

「あ、すいませーん」

それでやるかたなくなつて立ち尽くしていると、後ろから声をか

けられた。

「この病院の先生ですよね」制服姿の男子高校生だった。「この辺に精神科の真壁先生、通りませんでした？」

なんだこいつは。俺は思いっきり怪しむ視線を向けた。ここは入院患者とその見舞いくらいしか用のない場所だ。それも真つ昼間だ。学生はこんなところにおらず、大人しく学校で勉強するがいい。

「どなたかのお見舞いですか？」

がしかし、病院だつてオフィスだ。医師だつてビジネスマンだ。顧客たる患者の関係者かも知れない人間に、あまりおかしい態度は取れない。だから丁寧にそう確認する。

その学生は割と折り目正しい部類だった。

「いえ、そういうわけじゃないんですが。真壁先生にちょっと用事がありまして……あ、今日俺、午前あがりなんで、別にさぼってるわけじゃないですよ」

きちんと言い訳もする。高校生の時分に午前あがりなんてことがあつただろうか。遠い昔すぎて思い出せないが、まあ最近はそのらしい。

「真壁なら今確かに通りましたが」俺は薄暗い廊下のどん詰まりにあるエレベータを指差した。「私も詳しくは把握しておりませんが、少々立て込んでいますようです。ご予約がおりでしたか」

「あ、いや、特には」

学生はちよつとばかり面倒そうな顔になり、そつか、診察と被つたか、と呟いた。あのエレベータがどこへ通じているか知るはずもないのだから、勘違いしても仕方ない。悪いがあれの行き先は患者のいない場所だ。

「分かりました、じゃあ、いいです。ありがとうございました」

学生は若い男らしく首から上だけで亀みたいな礼をし、さつさと帰った。後ろ姿で気付いたが、彼はぐつしやりだった。髪からシャツからズボンから、肩に背負いあげた学生力バンから、のべつまくなし濡れているから、関心の他に向いた目では分からなかったのだ。

「……雨か」

廊下の窓から外を見ると、音もなく雨が降っていた。いつの間に降り出したのか分からないが、眼下の道路や街路樹はすっかり湿っている。今朝の天気予報を思い出す。降水確率、五十はなかったはずだ。俺は五十を過ぎたら傘を持つ。あの学生だって傘の持ち合わせがなかったから、あんな姿になったのに違いはない。

帰りの時間までには止むのだろうと、雨を睨む。ほんのわずかの間だったつもりが、次に廊下に目を戻した時には、既に学生の姿はどこにもなかった。

「……けちがついたな」

なんだか化かされたような気分になり、俺はひとりでがしがし頭を掻いた。もうこんな馬鹿げたことはしまいにして、仕事に戻ろう。雨はいかん。人をものぐさにするし、注意力を殺ぐ。隠れてろくでもないことをするには絶好のカーテンだ。

真壁先輩がその向こうでいったい何をなさっているか……空全体が、俺がそれを知るのを阻止しようとしている気がした。あの人は嫁さんに晴れ女を選んだくらいの生粋の雨男だ。雨雲とはさぞ懇意なんだろう。

雨は、俺があの子のことを忘れたところに、音もなく止んでいた。

アメダマ・システム

『ぼくたちのまちわたしたちのまち』

お母さんにこのプリントを見せた時、なんだか目がちかちかする、とお母さんは言った。くまが二三匹見える、とも言った。大人はむつかしいことを言う。ぼくも一日も早くあいうむつかしいことが言えるようになりたいものだと思う。そうしたら身長は百八十センチメートルを越え、お父さんの助けを借りなくても車庫から自転車を取り出せるようにもなっているに違いない。まったくその日が楽しみだ。

けれどぼくが今しなければならぬことは、このプリントからくまを探し出すことではない。『ぼくたちのまちわたしたちのまち』の下に続く先生の指示に従い、ぼくの町のことを「りぽー」と「することだ。ぼくは「りぽーたー」となる。ぼくはたいへん観察眼の優れた小学生だから、きつと並外れた「りぽーたー」になるのは間違いない。先生もびつくりして、朝礼で表彰してくれるかも知れない。お母さんはさらに目をちかちかさせることになるだろう。

ぼくはクラスで唯一と言っていいに違いない、ぼくに勝るとも劣らない賢明な小学生である雨沢くんと共に共同研究できることになった。ぼくらはわずかの時間も無駄にしないよう、帰宅途中に路上で作戦会議を開く。コウイン矢のごとし。

「きょうどしりょうかんに行くの？」

雨沢くんはどうしても「郷土資料館」とうまく言うことができない。彼は誰よりも早く九九を覚え、誰よりも高い跳び箱を飛べるのに不思議なことであるが、人には得意不得意がある。ぼくはそのがたがたして聞き取りづらい「郷土資料館」を何度聞いても、決して指摘はしない。

「町のことを調べるには一番確実な資料をそろえているよ」

ぼくが淡々と述べると、雨沢くんはそれはそうだねと言った。そ

して、でもと続けた。一度相手の意見を受け止めた上で別の可能性を提示する高等技術である。

「だからこそさ、みんな行くと思うんだよね」

「うん。それは確かに」

「そしたらさ、みんな同じ町に住んでるんだから、おんなじ発表になっちゃわない？」

「それはどうだろうか」

ぼくは即座に切り返してしまつて、即座に後悔した。雨沢くんのように、ぼくにもワンクッション置ける心の余裕が必要だとは常々思っているのだけれど、どうもうまくいかない。頭の回転が早すぎるのも考えものだ。

「同じものから同じものを作ろうとしても、作る人が違えばそれは不可能だとぼくは考えるね」

「そっかー」

雨沢くんは晴れ渡った空を見上げて腕組みする。彼は特別注意して前を見なくても障害物を回避できるという、すばらしい特技の持ち主だ。現代版二宮キンジロウ。

「実を言つとね」

彼はなんだか大人びた感じで、急にそう言った。

「ぼく、あんまり、あそこには行きたくないんだよ」

「へえ、それはなぜだい？」

「ぼくのひいおじいちゃんと、あそこの館長さんがとっても仲良しで」雨沢くんは本気のいやそうな顔をしている。「ぼくが行くとおかしをくれる」

「それはいいね。ぼくやきみみたく脳の働きが盛んな小学生にはおかしは必要だ」

「そう？」

「きみは偏食なのかい。それとも余計なカロリーを摂取したくないとか」

「ヘンシヨクって？」

ぼくは偏食を説明してあげた。いちよりくんはむつかしいことを知ってるなあ、と彼は感心した。素直に相手を褒めることができるのはいいことだ。

「そういうんじゃないけどさ」偏食家疑惑を打ち消し、雨沢くんはもごもごする。「きみもいっぺん食べてみるのもいいかも知れないね。百聞は一見にシカズだし」

そんな慣用句を知っていて、偏食を知らずにいたのは少し変である。知識も食物も偏るのはよくないと肝に銘じる。ぼくはジジョウ能力の修行中なのである。人から指摘されるまで自分の悪いところを直せない、こんな大人にはならないで欲しいと思うよ、とお父さんがニュースを見ながら言ったので、ぼくはそうならないように気をつける。

郷土資料館へは、日曜日の朝からでかけることにした。その週の日曜日は早朝から天気が崩れ、雨沢くんと駅前に集合したところにはどしゃ降りになった。彼はでも、雨沢くんと言うくらいで、雨の日も機嫌がいい。ぼくは彼を見て、天気ひとつで予定をキャンセルしようかとまで考えた自分を密かに反省する。

「タオルを貸してくれるよ」

びしょ濡れの肩を気にするぼくに、歩きながら雨沢くんが言った。「館長さんは親切なんだ」

ぼくは、それは資料館館長として水濡れから資料を守ろうとしての行動じゃないかと考える。でも会ってもいない人の人格を決めてかかるのはよくないだろう。そうして館長さんの人柄を楽しみに雨の中を突貫し、傘なんて意味ないもんだねと言いつつ合いながら大きな資料館の建物に飛び込むと、体の恐ろしく大きなおじいさんが目の前にいた。

「やあ、そうちゃんじゃないか。ひさしぶりだな。でかくなつたな。何歳になった。そうか五年生か。五年生の今ごろってえと、あれだな。ぼくたちのまちだな」

雨沢くんがこそりと教えてくれたことには、彼こそ郷土資料館の

館長さんだ。彼はちょうど資料館入り口周辺の床にモップがけをしており、雨沢くんが通るなりいっぺんにいろんな言葉を浴びせてかった。考えなしの発言をぼくはよしとしないけれども、あいさつの言葉を瞬時にこれだけ並べ立てるのはそれとは別格な気がした。しかもぼくたちの来意を話す前から当ててしまった。すごい人だ。

「そっちの子は初めてだな。そうちゃん友だちかい」

館長さんの声は大きくて、ぴかぴかした床や石の柱で非常によく跳ね返る。ぼくはお父さんにこの間教わった「はねかえり定数」のことを思い出す。e＝1。

「イチヨリい？」

雨沢くんがぼくを紹介してくれたらしい。館長さんはぼくのたった四文字の名前の中に、何かを疑ってかかる時のようなとてもない高低差をつけた。それから、ハハアンと言い、よきかなよきかなと言った。大人とはほんとうに意味が分からないものである。お母さんよりもおじいちゃんの方が意味が分からないことから明らか。ことに、お年寄りになるほど難しさは増す。非数学的キノウ法。

「よしよし。ヨリ、お前さんは生まれた時代に恵まれた」

館長さんがぼくの家での呼び名まで当てたので、ぼくはいい加減不思議の度合いが振り切れた。

「まあまずは体を拭け。傘は畳んでその中だ。そのマットの上で十回行進してな、靴の裏の水を取る。ほい手ぬぐい。ほいちり紙。なんだ、口が青くなってるな、ぬくうい茶でも飲むか？」

なんだか資料館へ来たというより、古びた喫茶店にでも来たみたいだ。世話焼きマスターのかびた本の臭いがする喫茶店。古民家と蝋人形展示あり。名物は欠けた湯のみで出てくる沸騰番茶だ。

「もー、こんなぐつぐつに煮ちゃったら飲めないっていつも言ってるのに」

館長さんの部屋の中で、雨沢くんはぶつぶつ言いながら湯のみを吹く。どうやら毎回お茶を出してもらっていて、毎回冷ますのが大変なようだ。

郷土資料のひとつみたいな倒れかけの机の上に、パソコンではなくてそろばんと大学ノートと万年筆、何に使うのかぼくには分からない、罫線がびっしり入った画用紙みたいなもの束。この部屋はぼくのおじいちゃんの手紙にちよつと似ている。おじいちゃんはむつかしいことばかり言うくせにデジタルには弱く、けれどもデジタルでやるのと変わらないことがアナログでできるのだ。ぼくらはきつと、おじいちゃんがあななるまでにした努力をすつ飛ばしている。だから代わりに、おじいちゃんよりもつとすくなくならなくてはならない。

「飲んだか。なんだ飲んでねえじゃねえか。そうちゃんまだ猫舌治んないのかい。そんなことじゃあ立派な大人になれねえぞ」

ぼくは慌ててお茶を飲み下し、口の中を火傷した。

「ほい、飲んだらまたアレやるからな。ヨリにもやるからな。頑張って飲め。飲んであつたまれ」

「うーん……」

館長さんはどこかから戻ってきたかと思うと、またせかせかどこかへ出かけていく。雨沢くんはひとりで何回かうーんと唸った。

「アレというのは、例のおかしなこと？」

「そう」

「きみはほんとうにそのおかしが嫌いなんだなあ」

「嫌いつてわけじゃないんだけどな」

彼はぼくに勝るとも劣らないたいへん賢明な小学生なのに、このおかしの話題になるともごもごする。いったいそのおかしが彼にどんな影響を及ぼしているのか、たいへん興味深い。

ぼくらがぐつぐつのお茶を飲み終わって、今にも不完全燃焼しそうな古ストーブでぬくぬくしていた頃、館長さんは資料館の広大な床の掃除を終わった。館長さんというのは総司令室にどっかりとして、床の掃除はもちろん資料の整理やお客の相手や色んなことを専門にする人たちを束ねているものだと思っていたけれども、彼はぼくが想像した以上のこまごました作業をすべてひとりで行っている。

万能である。

「ほい、じゃあ、これな」

ぼくらが空にした湯飲みを満足そうに眺め、館長さんは上着のポケットから郷土資料のひとつみtainな汚い袋を取り出した。ワドウカイチンがじゃらじゃら出てきそうである。でなければセンズかチコの実でいっぱいであろう。

しかし、館長さんが口紐を緩めてポン、ポンと一回ずつそれを振ると、受けとめたぼくらの手の上には、透明なビー玉のようなものがコロ、コロとひとつずつ乗ったのだった。

「これがおかし？」

「そうとも」

ぼくは雨沢くんに尋ねただけれども、館長さんが得意げに答えてくれた。雨沢くん、ときちんと相手を限定しなかったぼくの不手際だ。

「飴玉ですか？」

「アメダマにや違いはないが、ヨリは多分今勘違いしている」
まったく意味不明な館長さんである。

「こいつは」彼は体同様巨大な顔をめいっぱい使ってにんまりとする。「雨玉ってんだ」

「だから飴玉でしょう？」

「箸の端から糸垂れて橋の端から鮎一尾ってな」

「ぼくはあなたの言うことがしばしばよく分かりません」

「しばしばだつてよ」

館長さんはすばらしい大声で笑った。カカタイシヨウ。

「それ食って勉強に勤しめよ」

そうして袋を元のポケットにしまい、やっぱりどこかへ出て行った。

「……館長さんはとっても親切なんだ」

雨沢くんが、ロボットがあらかじめインプットされた文章を喋るみたいな声で言う。

「雨沢くん」ぼくはハハアンと思った。「いやなものはいやだと、はつきり言うべきだとぼくは思うよ」

「いやって言うかねー。いやじゃないけど、いやんなっちゃう……」

雨沢くんはぼくより四ヶ月も年下のはずなのに、言うことのむづかしさはまるで大人のようなのである。人間は複雑だ。

「ぼくはこれを食べてもいいんだろうか」

「いいんじゃない？」

「じゃあ、食べることにするよ」

すると雨沢くんも、これからバンジージャンプに挑もうとする高所恐怖症の人のように、じゃあぼくも、と言った。ぼくらは並んで、透明なビー玉を口に押し込んだ。

その飴玉は奇妙なことに、甘くも辛くもなければ、しゅわしゅわとしなかった。ただ上顎と舌の間をコロコロし、歯に当たってコンとする。何を聞いてもあなたにお任せしますとしか答えない人を、お父さんがジシュ性のない人と言う。それならこの飴玉はまさにジシュ性のない飴玉である。お前はいったい何味なのだ。あなたにお任せいたします。

ちよつとの間舐めていると、飴玉の表面がちゅるんと剥けた感じがした。剥けたその一枚はさらつと水に変わって、火傷の口内をひんやり冷やして気持ちがいい。それは突然、とんでもない甘みを帯びた。

興味深い味がするねえ、とぼくは隣に聞きにかかった。そして実にびつくりした。そこには雨沢くんではなくて、同じクラスの葛西^{かさい}さんがいるのである。どこからどう見ても葛西さんだ。彼女は最近いたくお気に入りらしい白地に水色の細かい水玉模様のあるブラウスを着て、短い髪をさらさら揺らして大笑いしていた。口を開いて笑っているのに、声だけがまったく聞こえない。ぼくが見つめていると、葛西さんはふいに真っ黒な目玉をクルリとこちらに向けて、え、の形に口を動かす。そして、わあ、だか、まあ、だか分からないけれどもとりあえずア行の口をして、こちらに腕を差し伸べる。

涼しげな水玉に覆われたすらりとした腕を見た時、ぼくはどきりと胸を跳ねさせた。

「この時」、ぼくは彼女の机の上からひらりと落ちた、子犬の写真のクリアファイルを拾ってあげたのだ。ひらりと落ちてから、ぼくはかなり長いことじっとそれを見ていたのだけれども、葛西さんは友だちのお喋りに夢中で全然気付かないのだ。ぼくは満身の勇気を振り絞り、三つ隣の自分の席から葛西さんの足許へ忍び寄り、クリアファイルを拾った。床とクリアファイルとの間に差し込んだ指の、爪の中に埃と砂がはさまったのを覚えている。これからは床のほうきがけを念入りにしようと思ったものだ。

はい、とも、落ちたよ、ともとうと言えなかった。人間の口が時としてまったく動かなくなるのをぼくは知った。葛西さんは、え？　と言い、ああ！　と言い、それから、ありがとういちよりくん！　と言った。彼女はそのクリアファイルが、ブラウスと同じくらいお気に入りなのだ。

今、ぼくの目の前にいる葛西さんの手に、子犬のクリアファイルはない。空っぽの両手を胸に押しつけて、声の出ない口でありがとうと言っ。そしてすぐ、友だちのお喋りに戻っていく。ぼくは「あの時」とまったく同じように、動かない口を無理に動かそうとしてもごもごした。途端、残っていた飴玉がすべて、さらっと水に変わった。葛西さんは透けて、窓のガラスを流れ落ちる雨みたいにとと流れていなくなった。

一連の出来事についてぜひとも雨沢くんに報告しなければならなかった。『ぼくたちのまちわたしたちのまち』どころではない。この飴玉は世紀の大発明だ。

「あまさわく……」しかしぼくは、ぼくの見たことを報告することはできなかった。「……どうしたんだい、雨沢くん」

葛西さんのマボロシが現れたことと同じくらい、びっくりしてしまったからだ。

「なんでもないんだ」

雨沢くんはそう言いながら、ぼろぼろ涙をこぼしている。

「なんでもなさそうには見えないよ。どこかがひどく痛いか、何か
がひどく悲しいか、どちらかにぼくには見える」

「ぼくもそんな感じがする。でも、なんでもないんだよ」

彼はたいへん賢明な小学生であり、余裕という点ではぼくより優
れているから、先生や友だちに無闇に心配をかけない。誰かの前で
こんなにぼろぼろ泣く雨沢くんは初めて見た。まるで今日の雨が今
だけ彼の目に及んだようである。彼が泣くほど雨音も強くなる気さ
えした。

転んだりけんかしたりした後に大泣きしている友だちには、かけ
る言葉も見つかるが、理由がさっぱり分からないのに大泣きしてい
る雨沢くんには、ぼくはいつたいなんと言ってあげるべきなのだろ
うか。

「きみは葛西さんを見るとそんなふうになるんだったかなあ」

ぼくが首を傾げて言うと、雨沢くんも、葛西さん？ と首を傾げ
て言う。

「ああ。いちよりくんは、葛西さんを見たんだね？」

「と言うと、きみは違うのかい？」

「みんな違う」雨沢くんは気丈に涙を拭った。「同じものから同じ
ものを見ようとしても、見る人が違えばそれは不可能なんだね」

ぼくはますます首を傾げる。彼は子どもだけれども、ひょっとし
たら大人よりむづかしいかも知れない。とすると、別にむづかしい
ことを言うことが大人になるということではないのだ。ぼくは大人
になるための計画を練りなおさなければならぬだろう。

雨沢くんが目を腫らしたままで、よしやろう、と奮起したので、
ぼくはそれ以上何も言うことなく、一緒に館長さんの部屋を出て『
ぼくたちのまちわたしたちのまち』に取りかかった。ぼくらはその
日一日ぼくらの町について精力的に調査し、深遠な考察を得て館長
さんを感じさせた。それから放課後を三日分ほど使って、実際に町
を歩いての調査も行った。百聞は一見にしかず。ぼくらの「りぼー

と」はこれによってさらに奥行きあるものになったと強調しておく。ぼくらの発表した「りぽーと」を先生はたいへん褒めてくれたけれども、今もって朝礼で表彰されそうではない。もう少しはつきりと、教室の奥を見てお話しするともっといいね、とアドバイスを受けたきりだった。ぼくは決してプレゼンテーション能力に乏しいものではない。ただ葛西さんが前列のまん中にいる会場では、口がまったく動かなくなるあの現象が起こるので、はきはき喋りようがないのである。非常に困ったことなので、近々原因を究明しようと考えてる。

けれどぼくは今、館長さんのおかしのシステム解析に夢中なので、小学校入学以来最高に忙しい。葛西さんとプレゼンテーションの関係については、飴玉の不思議についてなんらかの結論が出てからの着手になるだろう。雨沢くんがなかなか資料館へ行きたがらないから解析は難航しているが、館長さんはがんばれよと言ってくれる。これらを解決できたら、ぼくは世間からほっておかれないだろう。これらはそれくらい難解な問題だと思う。特に飴玉の方はまずどう調べていいのか分からなくて、ぼくはいたずらに虫歯を二本増やした。目下非常に痛い。これだけの対価を払ったのだから、きつとぼくはこの問題を解決してすばらしい名誉を得るに違いない。ノーベル駄菓子賞。

ぼくが葛西さんを見ていた間、雨沢くんが見ていたものについて気になるけれども、ぼくは敢えて聞かないのである。人にはいろんなジジョウがあり、そのすべてを人に語れるわけではないとおじいちゃんが教えてくれた。これはぼくにもたいへん分かりやすい理論である。それは大人についての話だったけれども、雨沢くんは大人より大人らしい子どもだと考えられるから、ぼくはこの理論を彼に適用するものだ。

03:30:00

あたし、眠れない女。

昔からそう。最初どうして始まったのかもう分かんない。でも別に体調が悪いわけじゃなくてね。昼間の仕事もちゃんとできたし、夜には自然と眠くなる。問題はそこからの。あの頃は、〇時四十五分、二時五分、それから五時二十二分。目が覚めて時計見るといつつもこのどれか。寝てるんだけど、長続きしないのね。

科学的にほんとに知らないけど、あたしはそういう浅い眠りの時に夢を見る。だから夢も見っぱなし。

それでだいたい、内容は覚えてない。

夢見たってことは覚えてるのにね。記憶って謎。

あの夜、五時二十二分の目覚めの後、布団の中からきんきに冷えた空気の中に顔だけ出して、必死に夢の内容を思い出そうとした。思い出す直前！ て感じはするんだけど、全然思い出せない。頭は冴えてる。何しろ寒くて。

布団の中で震えてたら、その日は朝から雪が降るかもって予報だったのを思い出す。途端、夢の内容なんかどうでもよくなる。

あたしはむくつと起き上がって、遮光カーテンを開けて、窓の外を見た。真っ暗い。街灯の周りしか見えない。空も真っ暗いから、曇ってることは分かった。この辺はド田舎じゃないけど、都心と違って空気が澄んでるから、晴れてる日の星の眩しいことったらないの。あたしは星が恋しくって帰ってきちゃったのかも知れない。都会の生活、あんなに憧れてたのにね。

五時二十二分を最後に、もう眠れないことは分かってた。だけどその日は土曜日で、普通の会社員だったあたしは土日休み。真っ暗で静かでひとりぼっちの時間。このころ、あたしはこの時間の楽し

い潰し方を開発してた。その日の気分は、酒盛り。

自分以外だあれも起きてないような音無しの世界で、頭冴えちゃうと、テンション上がったのね。

あたしは冷蔵庫の横に置いてたウヰスキーの瓶とグラスを持ってきて、セーターと膝掛けかき集めて布団の中からアンカ引つ張りだして抱えて、防寒対策万全で窓際に座って、電気もつけずにひとりで始めた。星見酒にも雪見酒にもならない。これなに？ 闇酒？

そのウヰスキー、知り合いの変な男がその頃いきなり開いたバーに置いてたやつで、けっこう旨いの。幸せ気分でちびちびやってたら、電話が鳴った。まだケータイなんて誰も知らなかった頃。こんな時間に？ って思ってたなら、ジュンヤだった。

ジュンヤとは同年。幼稚園から高校までのながあい同級生。

「どうしたの？」

「あーあ。失敗」

何事かと思つて聞いたら、いきなり落胆された。

「なあに、感じる」

「実験よ」

ジュンヤの声はいつでもどこでも、落胆でも楽しそう。

「眠れないって言ってたでしょ」

「だから？」

「ほんとに眠れてないのか、実験。五時二十二分？」

あたし嬉しくて笑っちゃった。

「ひど。疑ってたの？」

「嬉しいなら素直にそうと言いなさい」

それからあたしたちは、ちょっとだけ喋った。あたしがひとりで闇酒してるって言うと、ジュンヤはかっこいいーと言つてはしゃいだ。あいつのかっこいいの基準ってほんと謎。ただ自分じゃないものに対して言うことが多かった。今思うと。

「わ、雪！」

回線の向こうでいきなり大声がして、あたしは耳がきんとした。

「うそ！」

でも雪の方が大事。慌てて受話器のコードを伸ばしまくって、窓の外に目を凝らす。ちよつと暖房つけたから、うつすら結露しちゃった。耳に当てっぱなしの電話から、つめてーと喚くジュンヤの楽しそうな声が続く。

「どこからかけてんのよ、あんた？」

てのひらでガラスを擦って透明な丸をつくり、そこから外を覗きこみながらあたしは言った。スポットライトみたいな街灯の光の中を、ゆつくりと下降する白い水玉が見えた。

「研究室。五時二十二分なんてぜってー起きねー、と思ったから」夜、誰もいない研究室の方が実験が捗るって、あいついつも言うた。学生だったの。大学院生？

「もうさあ、オールナイトは別にいいんだけど。何か待つものがあるってちよつと感じ違うんですよ。もーそわそわしちゃって。二時五分狙いでいつちゃえばよかった」分単位までよく覚えてるわよね。「でも今日に限って安らかな眠りがおとずれてたらなんだし。朝方なら起こしちゃっても罪輕いし？ で、やっと待ちに待ったお時間でしょ。せつかくだから休憩がてら外出してみた」

ジュンヤの研究室は十ウン階にあつて、外階段の踊り場からの夜景が絶景なんだって。でもね、今となつちゃあたしも想像つかないけど、昔は屋根のないところから電話かけるなんてレアだったのよ。公衆電話にはだいたい屋根があるでしょ。家の電話は当然家の中でしょ。その他の電話なんかほんとに好きな人じゃないと持てないよ。うなのばっか。ジュンヤは科学好きだけど器械好きじゃない。

あたしはその時、不思議なとこに電話のある研究室ね、なんて思ってた。

「雪はきれいだね。全部まとめて真っ白になるね」ジュンヤもテンション上がったみたい。「まるでぼくを待ってたみたいじゃないですか。やっぱ、ぼくプロの雨男になれますよ」

ジュンヤのプライドは雨男に起因した。ほんと変なやつ。

「ばかじゃない？」

「失礼な！」

いつもと同じにあたしがあしらって、あいつが叫ぶ。その時、ぴん、とデジャヴがあった。

前にも夜中に、電話で、こんなふうに寒い中いろんな布にくるまって、ほろ酔いで、ジュンヤに「失礼な！」って言われた気がしたの。「失礼な！」って、あいつのよく言うフレーズだったけど、それ以外の気温とか時間とか、全部ぴったり同じことがあった気がしたの。思い出す直前！でも結局、いつだったか分かんない。

「明日も朝からやるんでしょ？」

あたしは雪を見つめたまま言う。ジュンヤは土日どころか正月もない、めちゃくちゃな研究生活をしてた。だからあいつ自身あんま気にしないのね。眠たいとか。休んでないとか。でもだからって、疲れないわけじゃないじゃない？人間。

「ちよつとは寝ないとだめだからね」

「アナタに言われたくないな」

「あたしはいいの。あんたはダメ」

「うわーい。とんでもねー」

「とんでもなくない。いいソファがあるんでしょ。あつたかくして、寝なさいよね、じゃあね」

「えー！ちよつと。待ってよワカコさ」

あたしはそれで、むりやり電話を切った。切っちゃった。

嬉しかったけど、心配だったの。あんまりめちゃくちゃだから。いつ寝てんのか自分が分かんなくせに、人の心配しないでよ。て、あたしもか。

朝になつたら世界は急に光りだして、ジュンヤの望んだ通りまとめて真っ白くなってた。ニユースをつけたら積雪は多いところで十五センチとか二十センチとか言ってた。

研究棟の横でぐちゃぐちゃになってたあいつの上にも、二十センチ

チの雪が積もった。

冷たい夜気の中で腕を出して、枕元のケータイで時間を確かめる。今ではあたしの目覚めの時間は一回になったの。一時ごろ家に着いて、すぐ寝るんだけど、絶対この時間には目を覚ます。一時間と五十二分くらい布団の中でごろごろしてる。それから昼まではぐっすり眠る。今の仕事は夕方から。

もしかしたら、これも夢なのかもね。毎日同じ時間に目が覚める夢。でもこの夢の始まりばかりは、あたしもちゃんと覚えてるの。三時三十分。あいつが完璧、何もかもやんなっちゃった時間。ほんとに電話したかったんだろう、時間。

▼濡れ縁

鴉からすです。さつき木から落ちました。

……あらゆるつっこみはこの次第を聞き届けてからお願ひします。だいたいのレパトリーは百万羽の仲間たちから言われつくしましたので。

とにかくびっくりしたんですよ。

今日は朝から、ひどい雨でしょう。私は自慢の黒羽を濡らすのはいやなので、木の中で雨を避けていました。それは桜の巨木で、花の時期をすっかり終わって賑やかな緑に覆われていましたけれど、朝から降られてこちらも若干しよげているみたいに見えました。

その桜、ある人間の家の庭にあつたのです。町じゃ有名ですね、あの、古式ゆかしき大邸宅の庭園ですよ。枝先からは縁側が覗けます。

そして縁側に、おむつ一丁の赤ちゃんがいたのです。

その子は腰に巻き付いた紐で柱と結びつけられて、ひとりぼっちでした。見ていられないからそうやって安全を確保したんでしょうけども、だったら一緒に中へ入れてあげればいいですよ。赤ちゃんは降り込む雨に今にも当たりそうでした。

暇ですのではばらく見つめてみると、どうもその子がかえって濡れたがつているみたく見えてきました。次から次に落っこちてくる雨粒を見上げ、ぽかーんと口を開いたまま、じりじりと紐を伸ばして縁側の縁の方へ這っていくのです。あれ、ハイハイって言უნでしよう？ その子は力強いハイハイで外へ外へと向かい、その内ほんとくに縁ぎりぎりに到達しました。紐はめいっぱい引っ張られていますから、解けない限り落ちる心配はないでしょう。赤ちゃんもそれを分かっているんでしょうか。全体重を紐に預けるようにして、雨空に向けてぐうんと片腕を伸ばしました。大福のおもちみたいな

腕があつという間にびしょびしょです。赤ちゃんはなお腕を引つ込めません。

するとなんと、もみじの葉っぱくらいしかない手のひらに、ささやかな水が溜まってほのかに光りだしました。私は胸を乗り出しました。光はぼんやりして、目の錯覚かと思う内に消えてしまします。そしてその場所から、むくりと小さな髪の毛の長い人型のものが立ち上がったのです。ほんとです。赤ちゃんは手の上に現れたばかりの小人を乗つけて、きゃっきゃと楽しそうに笑っていたのです。

開いたくちばしが塞がらない。

私はそれがほんとに人なのか、でなければなんなのか見ようとして、ますます胸を乗り出しました。

そして、木から落ちたのです。

何か。鳥のくせに。あ、やっぱり言いますか。そうですね。

Regain Your Pride!!

先日、会社の後輩長塚がおかしな話をしていた。私と長塚と、長塚の同期の佐原との、小さな飲み会の席でのことだった。

「家の近くで、サラリーマンに会ったんです」

出だしは普通だった。

そいつはよれたスーツ姿の、ぺちゃんこの鞆を小脇に抱えた、疲れたサラリーマンの凡例とも言うべき風体の男だったと言う。そのサラリーマンは、長塚の前方からよたよたと歩いて来た。見ているだけでこちらが疲れてくるような足取りだったそうだ。

長塚はまだ賃貸住まいだ。川沿いの、周りにもいくつか今風のマンションの並んだところに住んでいる。似たような境遇の通行人と行き違うのも、よくあることだと彼は語った。夜遅く、まだ若いのに疲れた顔して、酒気など帯びてひとり帰り路をふらつくサラリーマンとすれ違うのは。ただその時は舞台が整い過ぎていた。ベッドタウンの夜だから明るいが、朝から夕方まで小雨の続いた日で、空気はしっとりし、乾ききらぬ真つ黒いアスファルトがぬらぬら光った。長塚は怖い話が得意でない。怖すぎて、一生懸命下を睨んで足を早めたという。

しかし、そのサラリーマンは彼とただではすれ違わなかった。

「俺のこの辺まで来たところで、立ち止まったんです」

焼き鳥の串で自分の左斜め前を示しながら、長塚は言った。

「ちょうど街灯の下だったんです。ものすごい平らな顔で、一瞬のっぺらぼうかと思いましたよ。でもちゃんと目があって、あんまり俺の顔じいっと見てくるんで何事かと思ったら、いきなり、『サラリーマン?』って言うんですよ」

「サラリーマン?」

佐原が、面白がって聞き返した。

「そう、『サラリーマン?』って聞いてきやがったんだ。今考えた

らなんか腹立つな。でもその時は怖くて怖くて、さつさと家に入っちまいたくて。はい、とか、うん、とか、なんか答えたんですよ。そしたらそいつはまた」

長塚は興奮して、ジョッキの残りを煽る。

「『二十四時間働けますか？』だって」

何かのCMで聞いたようなフレーズである。

「……ほんとにかあ？ そりゃあ」

「俺もまだ、夢だったかも知れないと思います」

「で、お前、なんつった」

「いやもう、意味が分かんなくて。はあとかなんとか、唸ったような気はするんですけど。急いで逃げたんで、正直覚えとらんです」

「へえ？」

三人とも、すぐにはそれ以上コメントできない。串を一本平らげてから、佐原が、

「あれみたいつすね」

と口を開いた。

「なんだ」

「いや、小学生の時とかにあった、怪談話つすよ。便所に入ったら紙がなくて、どこからともなく、赤い紙と青い紙どっちが欲しい？ とか訊かれて。赤って答えるとどうで、青って答えるところで、忘れちまいましたけど。結局どっちも殺されるんだったかな」

「ああ」

それは私も聞き覚えがあった。

「確か、どっちでもない、さっぱり関係ないこと答えた時だけ、助かるんだよな。口避け女に『ポマード、ポマード』みたいに」

「そんな感じつす」

「じゃ、お前はそんな時、その正解を答えたわけだ」

「ええ？」

私が味噌ダレにまみれた割り箸で指さすと、長塚は女みたいな声を上げた。

「なんでそうなるんですよお」

「きつとき。『はい』って答えたら過労死させられて、『いいえ』って答えたら失業させられんだ。おい長塚、なんて答えたのか思い出せ。こりゃ、全サラリーマンと日本経済の危機だぞ」

「ええ〜？」

結局長塚は正解を思い出さなかった。佐原も私もひとしきり面白がつて忘れてしまった。

ああ、私の馬鹿め。

なんであいつをちゃんと問い詰めておかなかった。

「サラリーマン？」

自宅のある住宅地の近く、壊れかかった街灯の下。私は目の前のくたびれたサラリーマン風男を睨みつけた。長塚の話と違い、驚鼻の中年顔だが、それ以外は見事に一致している。天候が作る雰囲気に至るまでぴったりだ。

なまじあんな話をして盛り上がった後で、しかも場所が暗くて人氣がない。にわかに恐怖がこみ上げる。

「サラリーマン？」

そいつは阿呆みたいに、私の顔をじいつと見つめてそれだけを繰り返している。

「……」

私の頭の中では、ありとあらゆる解答が溢れ出てぐるぐる回っていた。なんと言えばこの妖怪は満足する。なんと答えればこの窮状を打開できる？

だいいち、なんだって世の妖怪たちは、サラリーマンを狙うことにしたのだ。こういうネタは小学生男子を狙ってやった方がよほど盛り上がるし、長く語り継いでくれることを保証する。私のごとき仕事に疲れた中年のおやじを引っ掛けたところで、翌朝には酒と疲れの見せた幻覚として抹消されることうけあいではないか。

「ねえ、サラリーマン？」

見当違いな怒りに燃えていると、何かしら解答するまでは放さん
とでも言うように、妖怪が顔を寄せて来た。

南無三。もしもの時は許してくれ、我が家族たち！

「いいえ」私はきつぱりと言った。「違います」

妖怪はまた阿呆みたいに、じいつとこちらの目を覗き込んできた。
本当に妖怪じみているので、今にもそのちょっと傾げた首がぼとつ
と落ちるんじゃないかと、嫌な想像をしてしまう。

「……誰がサラリーマン？」

「はっ？」

続きがあつたか！

なんだこれは。私の知り合いのサラリーマンを紹介しなければな
らないのか？ こいつがそこへ行つて、そのサラリーマンがまづい
答えをしたらどうする。過労死か一家心中だぞ。誰がそいつを殺し
たことになる？ ああ私だとも！

「誰がサラリーマン？」

「……うるさい」

私は苛立ち、切れた。自分の意見もなく、阿呆みたいな質問で畳
みかけてうやむやに人を言い負かす。勘違いした若手にありがちの
その所行が私は許せないのである。それで一人前の面して社会を歩
かれちゃあたまつたもんじゃない。

私はゆらりと腕を上げる。没个性的サラリーマンの伝家の宝刀、
木の柄のついた黒い傘を低姿勢という名の鞘から抜き放ち、威風堂
々妖怪の顔を指す。そして、

「サラリーマンは私だ！ お前だつてどこからどう見てもサラリー
マンだろう！」

人のないのをいいことに、思いつきり怒鳴りつけた。

「夜中に見知らぬ人間に向かって挨拶もなしに職業を尋ねるとは、
サラリーマンの風上にも置けん。どこの社だお前は。新人のころい
つたい何を教わったんだ！ ふらふらと妙ないたずらしてないで、

仕事をしろ仕事を！ 会社と国家のためせっせと働いて税金納めんのが我々の使命であり誇りだろうが！」

妖怪が、停止した。

そして、そこから翌朝までの私の記憶は、きれいさっぱりないのであった。

私はその話を、長塚らにはしなかった。ただ後日、あいつの方から妙な報告を聞いた。

「栄養ドリンクが山ほど届いたんです」

長塚の顔は本気で何かを恐れていた。

「でっかい段ボールで十箱も。差出人不明なんで、飲まずに捨てましたが」

それからさらに後、ひとつの超有名製薬会社が、大手同業他社と業務提携して実質業界第一位となるというニュースを聞いた。業界内では青天の霹靂だったらしい。私はその道の人間ではないし、製薬会社の商品なんてたまのスポーツの際に購入するドリンクくらいしか興味がないので、業界第一位となった結果どうなったかさえ知らない。

その会社が長塚の家に届いた栄養ドリンクの販売元だとは、我々が今もってお互い話題にできずにいる、謎の偶然である。

R e g a i n Y o u r P r i d e ! ! (後書き)

これ……いいのかな……笑

▲八月一日(月) 晴れ

宿題を始めようとして消しゴムがすっかりちびているのを思い出して、これじゃ間違えられないから文房具屋さんが開いてからにしよう。と午前中はテレビを見て、お昼ごろ近くの文房具屋さんに出かけました。真夏の空はぴかぴかの真っ青で、一歩その下に出た途端じんわり汗が出ました。「THE DOG」の消しゴムを買って、あまりの暑さになんか飲みたいと思って自動販売機の前でおつりをちやりちやりしていたら、そこにおんなじように汗で湿った穂積くんが通りかかりました。宿題は明日からに決めました。

穂積くんは白い稽古着に紺色の袴姿です。ちっちゃいころから少年剣士なのです。夏休みに道場にいるのは当たり前で、むしろ私はまだお昼だって言うのに防具一式を竹刀に引っ掛けて肩に背負っていることの方に驚きました。つまりは、帰り支度万全ということです。

「帰るの？」

颯爽に軽快を足したみたいないつもの足取りで歩き去る穂積くん、私は慌ててその声をかけました。穂積くんはひとり歩いていると、だいたい周りを見てません。何か用のある時だけ、その相手だけをじいっと見るのが癖です。まるで試合と同じです。

いつもどおり全然驚かないで、ミナコじゃん、と間抜けな感じで呟いて、につこりする穂積くん。穂積くんはまつ毛がたつぷりして長いので、目を細くするとマンガに出てくるみたいな分かりやすい笑顔になるんです。

ちよつと女の子みたい。

本人はそれを少し気にしているので、普段はわざと怖い喋り方をしたりします。でも意識してない時は全然だめです。

「ぼく、ポカリー」

「自分で買って」

「買い食い禁止だもん」

買い食い禁止は買ってもらい食いをオツケーにする決まりじゃないと思います。けれど哀れっぱい顔で、運動したら水分補給しなきゃ、干からびるう、とあんまりしつこく訴えられると、しょうがないなという気になってしまふのです。

「サンキュ！」

ポカリのペットボトルを火照ったほっぺたに当て、にこーっとしてそう言うので、ますます、まいっか、という気になりました。

「もう帰るの？」

「うん」

私は自分のファンタオレンジを飲みながらもう一回聞いてみました。穂積くんはあっけらかんとしてうなずきます。

「今日はね。特別」

穂積くんがのけぞって音をたてて飲むと、なんでもものすごくおいしそうに見えるのはいつものことです。穂積くんがテレビでコマースヤルしたらポカリは今よりもっと売れるようになります。

「よく分かんねーんだけどね。今日はうちの親戚がばあちゃんちに大集合の日なの。稽古より大事だって父さんが言うからさ、しかたねーから、早あがり」

「ふーん？ 誕生日なの？」

「知らね」

「集合して何するの？」

「さあ。ぼく今年はじめて行くんだもん」

穂積くんははじめてなのですが、実は去年もその前も、穂積家の人たちは毎年大集合していたらしいんです。十歳になってはじめて知った自分の家の真実。いったい、親戚一同で何をしてるんだか？「そっぴやさあ、ミナちゃん、ヨリくんから変なメール来てない？」

ポカリに濡れた真っ赤な口で、穂積くんは言い出しました。穂積くんがヨリくんと言うのは同じクラスの変な男の子で、名前はいちよりくんです。私は夏休みに入ってから男子と連絡なんか取ってな

いので、いちよりくんとメールのやり取りはありません。

「何が変なメール？」

気になったので聞いてみると、穂積くんはなんだか言い辛そうにしましたが、すぐに教えてくれました。稽古着の胸の合わせ目からひよいとケータイを取り出して、メールを開いてこちらに向けます。あの稽古着の中はどんな構造になってるのか、私は見たことがないので知りません。

私は本文を黙読して、二回瞬きました。あんまり分かんない分かんない言つとお母さんが「少しは自分で考えなさい！」と怒るので、私は何かが分からない時に黙って瞬きをする子どもになったのです。

『天才、真壁一頼いちよりが偉大な発明の力で空を舞う。歴史の目撃者となりたい方は奇跡の丘へ集合されたし。八月一日、十八時四十六分、於ゆとりはま中央公園ゆとりの丘』

「あいつ、この暑さで頭にきちゃったのかねえ？」

突っ張った腕で私に向かってケータイを突き出したまま、穂積くんも目をぱちぱちしています。ほっぺたに落ちる長いまつ毛の影が、合わせてちらちら揺れてます。

穂積くんがやたらに瞬くと、涼しい風も吹きだしそんな気がしました。

くそ暑い道場の中にふいに涼しい風が吹いたのは、穂積良樹が早引けしてからしばらくのことだった。空気がこもっているので一瞬の風は気持ち良かったけれども、直後に何十年分もの青春のにおいが蘇ってそのすさまじさを再確認させられた。うちの道場の歴史は長いんだ。だから空調もがたがたうるさい扇風機だけで、冬は凍らし夏は蒸す。

「隙間風か？」

その扇風機、先生か中等部のでっかいやつらが常に占拠している。

おれら初等部の周辺に風なんか吹くはずはなかった。

「コウちゃん、どうしたのー？」

型を見てやってた一年坊が、おれの気が散ったのを見て声を上げる。少しでもできるようになったことは、すぐに何も知らないやつに教えてみるのが定着の近道。先生がそういう人だから、入ったばつかのちびたちの指導は五六年生がやる。ほとんど全部やってるかも知れない。

ガキどもの生意気を直すのはほんと大変だ。加えてほんと暑すぎだ。

「なんでもねーよ。いいから顎引け。持ち手がまた違ってるじゃねーか。それからコウちゃんとは何事だ。弘介先輩と呼べ。崇め奉れ」
「アガメタツレってなにー？」

「なんですか、だろ！ お前その口の利き方で先生さんところ行くんじやねーぞ！」

ああ、なんてまともな小学五年生だ、おれ。ここに通つてると自分の将来に安心するぜ。

つつか穂積良樹、どんな教育してんだ。

俺の受け持つてるちびは今日は来てなくて、こいつは受け持ちの穂積良樹が早引けしたんで手の空いてたおれのとこに來たに過ぎない。そして穂積良樹は顔同様な性格も女々しいやつで、おれのことをコウちゃんコウちゃん呼ぶ。ちびがおれをコウちゃん呼ばわりするのは、野原しんのすけが母親をミサエ呼ばわりするのと一緒だ。監督不行き届きだ。

「アガメタツレってなんですかー？」

「言い直さなくていいよ！ 説明したくもねえよ！」

一年坊相手に取り乱してしまった。不覚だ。それもこれも全部穂積良樹が早引けするからだ。なんだってあいつはこんな早々に帰りがったんだよ！ つつか中等部、いい加減そこどけよ！ 風を通せ！ おのれの横幅を自覚して恥じる！

人間の体と心の湿度は反比例の関係にあると思うんだよな。剣道

が盛況なのはいいけど、ここはとにかく狭すぎる。せまつ苦しい空間に、新しくてぱりっぱりの稽古着に着られてずんぐり膨らんだちびたちと、その指導にあたる上級生とがみっしりと詰まっている。かつさかさに渴いてささくれだらけの気持ちの外っかわで、蒸された肌からじんわり汗が染みだして、しずくになって流れ、それが全員分いっしょくたになって床板にしみ込んでく。

何十年分の青春のにおいはこうして、真夏の蒸し器の中で今年も熟成されてくんだ。

セイロの蓋を開けるとほんわかと湯気が立ち、ただでさえ差し迫り気味の室内をいっそうむさ苦しくした。ずんぐりみっしり二十ほども並んだ饅頭^{まんじゅう}は、それらを覗き込むむくつけき男ども同様じんわり汗をかいている。特異な味付けを施されたせいで、その表面は、せつかくの寒色の効果もあつたもんじやない鮮やかすぎる青色である。

「……本当にこれでよかったんだろうか」

「ばかやろう今さら怖気づくな」

「いいか、俺たちは言われたとおりによっただけだ。断じて間違っていない」

「自分を信じる」

「南無三法！」

むくつけき男どもは互いの傷を舐めあう年月のあまりに長きに渡ったせいで、もはや言うことが統一されてしまっている。どいつがどいつだか俺から見えていても混線してくるくらいである。そして誰もそのことを気にしない。

そいつらが寄ってたかつて自分たちを正当化するのだがしかし、むくつけき男どものひとりであるところの俺は、こればかりはどう考えても失敗としか思えなかった。いくら客の注文どおりとは言っても、常識的ラインというものがある。

「しかしその客つてのは、なんのためにこんなレガッタ・ブルーな薯蕷饅頭をご所望なんだ」

「まったくだ。薄皮のままこの発色を実現するためにとうとう餡まで真っ青だぞ」

「食い物に遊び心はいらないよ。恒常的に」

共に饅頭を作り続けて十年、饅頭へ注ぎ過ぎたばかりにしかるべき乙女に注ぐ愛を失って人生の迷路に迷いこみつつある無二の同士たちが、今度は不本意な色に染められた饅頭たちの無念を口々に代弁する。

「俺だって知らんがな」

俺は答えて額を拭った。日に日に暑くなる季節に、男だらけの饅頭工房はそろそろ地獄絵図の様相を呈し始めている。

「できちまったもんは仕方ない。後はこいつらを一刻も早く客のところへ届けるまでだ」

「市内だろう？ お前の出番だ」

「俺の月餅^{げっぺい}三号にこんなマツアオ饅頭を乗せる気か！」

「所詮ママチャリじゃない。チャイルドシート付きの」

「俺はあそこに乗って幼少期を駆け抜けたのだ！」

「駆け抜けたのはお前のママだ！ うぬぼれるな小僧！」

「わけが分からん！」

まあわけがからんのは我々のアイデンティティであるからいいとして、俺の愛用の自転車でこの青い饅頭を配送するのはどうしてもしやだった。間違いなく崇られる。明日の朝には月餅三号のチャイルドシートが呪いの紺碧に塗りつぶされているかも知れない。ばかな！

「しかし何かな。見ている内に、ちょっと愛嬌ある姿に見えてきた」
セイロの中に男汁を垂らさんばかりに覗きこんでいたひとりが、世迷いごとを言い出す。

「言われてみると確かに」

「なんかあれに見えない？ スライム」

「そう、それだ」

我々の作る薯蕷饅頭は、てっぺんのところを小龍包のようにきゅつと捻つてある。何故かと言われると諸説あるが、本人の唱える一説によれば手先が不器用すぎてそうでもないし格好がつけられなかったためである。この造形を身につけるのにだって並ならぬ修練を要したとも言われる。飽くまでも一説だが。

そうしたわけで、青くて艶やかで頭のとがった手のひらサイズの物体は、ファミコン世代の男どもに魔界ヒエラルキーの最下層に群生するモンスターを想起させた。

「やつらを舐めるな。成長したあかつきには灼熱の炎を吹くぞ」

「やめてくれ暑苦しい」

「諦めろ。我々を中心とした半径五百メートル圏内は常に暑苦しい」

「つまり我々はその範囲から逃れられないというわけか」

「そうだ。我々こそが中心だ」

男たちの妄想は世界の中心さえ容易に創り得る。

ほんわか湯気をあげ続ける魔物の群れを囲み、世界の中心で駄弁を弄す男たちの頭上には、湯気と熱気と妄想の折り重なりがレガッタ・ブルーの渦を成す。やがて渦の中心が饅頭の頭のようにきゅつと捻りあげられてゆくと、上空に向けて屹立した先端がスライムのごとくぷるぷる揺れ、不意にぷつと何かを吐き出した。

六十四分のスケールのスライムのようなその物体は、宇宙的速度で空を走り、饅頭工房の天井を破って真夏の青空へと突き抜ける。

「あ」

「……なんだよ」

「見た？ 今の」

「なに？」

「その木と木の間をなんかが宇宙的速度で通ってたの。UFOかな？」

「……なあ遊喜^{ゆうき}。お前一回眼科行け」

「えー？　なんでよう」

「最近、非科学的なものを見すぎだ。手のひらサイズの小人とか空飛ぶ人間とか。網膜に傷がついたのかも知れない」

「なにそれ夢がなーい。理系のくせに」

「理系は夢をひとつひとつ潰していくのが職務だ！　てしみじみ言ってたのお前だろ！」

「そうだっけー？　てかUFOって非科学的じゃないじゃん。ちょー科学的」

「科学者が議論すんのは地球外生命体の有無だよ。未確認な飛行物体なんか空一面にあんだから……あんまり乗り出すなよ、あぶねーな」

「だってまた通るかも知れないし」

「落ちるぞ」

「ここからくらいなら着地できる気がするわ」

「確かに衝突時にかかる力は質量に左右されるから、お前くらいの体重じゃひよっとしたらひよっとするかも知れない。でも同時に高さで衝突時間も重要だ。高さは見てのとおり。そして衝突時間は」

「ああもつ、理系……」

「どこが！」

「あつ」

「今度はなんだよ」

「あれ！　見て見て！」

「だから乗り出すなっつてば」

「だってあそこ！　雨沢先輩じゃない？」

「へ？　副会長？」

「副会長はとつくに引退されましたー。うわーでもラッキー！　一ヶ月半会えない覚悟してたのに！　なんで夏休みに学校来てるんだろ？　受験勉強とかしないのかな。生徒会に喝入れにきたのかな」

「……」

「まあなんでもいいや。あー幸せ。幸せついでにちよろつと降りてつてお話しちやおっかなー」

「何をお話すんだよ。全然関わりねーじゃん」

「あるよー！ 去年ね、あたしがまだ副委員長だった時、なんかの委員会の後で話しかけてくれてね？ 俺たちおんなじ“副”仲間だねーとか言つて！ ときめくじゃん！」

「なんでそれでときめくわけ？ 単に見た目に惚れたただけだろ」

「それはねえ、女子なら致し方ないよもう。だってかっこいいもん」
「……」

「それに、それだけじゃないもん。仕事してないように見せかけてそれとなく全体に目配りしてる懐の深さとか、行事間近でみんながぴりぴりしてるところに華麗に笑いの風を入れてくるセンスとか、体育祭の時盗撮目的で侵入してた変なおじさんを先生が来る前に取り押さえちゃった腕っ節とか、先輩がモテなかつたらその世の中の方が間違いでしょってくらいいの、て、あれ？ 一和、どこ行くの？」
「空を駆ける。宇宙的速度で」

「はい？ え、なんで突然？ 人がせつかく先輩のすばらしさを」

「所詮見た目が九割なのかあつ！」

「ああつ一和！ ダメだよこんなところから落ちたら、えっと、質量六十二キロの、高さ五階の屋上の……おい！ 衝突時間どれくらいだったーあ？」

「あ。投身自殺」

「……かなちゃんって時々怖いこと言うよね」

不自然に突然、かなちゃんの手から転げ落ちた買ったばかりのソフトラームは、きゅつと捻られたてっぺんを下にして、石畳の上で潰れちゃってる。確かにひどいありさま。でもこれ見て投身自殺はないと思うの。

「新しいの買ってくる？」

「いいよ。お金ないし」

「じゃあちよつとあげる」

「それ何味？」

私が差し出したソフトクリームを見て、かなちゃんはなんだか警戒するみたいな声を出す。

「ゆとりはま公園名物、青空ソフトだよ？ 知らない？」

「だから、何味なの？」

「え。えつと……」

私は家が近くで甘いものも大好きだから、青空ソフトはよく食べる。でも、ちっちゃいころから食べすぎて、ソフトクリームってのはこういう真つ青であまーい素敵なお菓子なんだって思ってたくらいで、改めて考えてみると……これ何味なんだろう。

「白いのと変わんないと思う」

「嘘！」

信じてもらえなかった。

そうして手ぶらになったかなちゃんは、私が青いクリームを舐めてる間、ずつと青い空を見てた。かなちゃんはよく空を眺めてぼつとしてる。空に恋してるっぽい。

それだからよく、誰も見てないような遠くのものについていきなり話し出す。

「あいちゃん」

かなちゃんが指で何かを指した。売店と不法駐輪と犬の放し飼いがはびこってるこの林の中からは、木のでっぺんのさらに上にちよこんと乗っかってる緑の三角が見える。ゆとりはま中央公園の駅寄りにある、ゆとりの丘ってゆう丘だ。丘ってゆうか山だ。あそこに登ると市営公園の中とは思えない非日常な高低差が見れるよ。どのへんがゆとりの丘なんだろう？

「あの人、何してるんだろう？」

かなちゃんはその丘のてっぺんを指差して、ぼつとした顔のまんま何かを不思議がってる。

「人なんかいる？」

私には緑の三角と空と雲しか見えない。

「いるでしょ。ほら」

「とんびか鴉じゃない？」

「違うよ。でもなんかはばたいてる」

私は確かにちよつと目が悪いんだけど、この距離だったら人のいるくらいに分かる。緑の三角の上には、いつもどおりなんにもない。前から思ってたけど、やっぱりかなちゃんて不思議。

「空を飛びたいのかなあ？」

「さあ……」

いくら空を飛びたくたって、あそこからはばたきながら飛び降りたりしたら、それこそ投身自殺だ。

「さ、食べ終わった」

私は青空ソフトを舐めきって空っぽになったコーンを三口できれいに食べてしまうと、非科学的な幻覚を見つけるかなちゃんを引く張った。おやつ時間は一日で一番暑いと思うの。だから、ソフトクリームは超特急で食べなきゃなんないし、できれば早く帰りたい。「さつさとやつちゃおう」

生物の遊喜先生が宿題に出した植物採集を、私たちは今日で終わらせちゃうつもりだ。単子葉類と双子葉類に夏休み中悩まされるのなんかやだもん。

「いつ飛ぶのかなあ」

「飛びっこないよ。人間が」

かなちゃんはいつまでも丘の上を気にしてる。最後に誰もいない丘を見つめたまま、人は飛ぶよ、と謎なことを口走った。

人がプロペラもグライダーも使わないではばたいて飛んでったりしたら、大ニュースになっちゃう。こんなどうでもいい町の広いだけの公園で、そんな世紀の大事事件が起こるわけないの。そんなものでしょ？ 世の中。

ところがこの野郎はその時、本気で飛ばうとしていたのである。こいつの行動を社会通念とか生存本能とかで理解しようとするの深みにはまるからやめた方がいい。アホなんだこいつは。根本的にこいつがいったい何を思っているそんな無謀な実験を行うに至ったかと言うと、これまたアホな話で、夏休みの自由研究のためだそうだ。自由にもほどがある。そんなこととして環境原理主義のモンスターペアレントたちが「自由研究廃止論」など唱えだしたらどう責任を取るのか。しかも、そんなことしたあかつきにはこいつは生きちゃいなかったらうから、やり逃げである。たちが悪い。

投身ぎりぎりで止めたのは私である。

十年経って成長した野郎を見るにつけ、止めない方が世の中のためだったんじゃないかと懷疑することしきりだ。

「学祭つてのは恋心の培養器なわけだよ」

その男、今も私と昵懇である。なんの因果か同じ大学にいる。というより目の前にいやがる。

「実行委員会としては、いかに多くの恋心を培養するかが成否のバロメータということだな」

しかも同じ学園祭実行委員会に所属し、何百人からいる委員らを取り纏める「本部」の中核を担う大幹部に上り詰めてしまった。分からないのは、こいつが委員長で私が外交というこの役割分担だ。昨年の本部メンバーの人選であり、私は彼らの手腕を全面的に認めるけれども、最後の最後でこの男を長に据えていったのだけは大間違いである。

名を口にするのも虫酸が走るため、紹介はご容赦いただきたい。こいつなんてこいつでじゅうぶんだ。

「というわけで企画、イベント立案にあたつての提案をきみからどうぞ」

「はい。とりあえずは委員全員からひとつずつアイディアを提出してもらうつもりです。問題は、うちの大学の悪しきアナログ信仰の

せいで人数分の用紙を刷らないと実現できない点ですが」

こいつのアホさ加減を物語る逸話なら山ほどある。例えば小学校三年の運動会。オクラホマミキサーの音楽がかかるべき場面で、小さなグラウンド中にガンダーラが響き渡り、踊りの輪は回り始める前に霧散した。その異様な荘厳さときたら保護者からもゴートウーユートピアのシュプレヒコールが上がったほどで、私の宗教に対する根深いトラウマともなった。こいつはすり替えたテープを焼却炉に投げこみ、その不完全燃焼するさまを愉しげに眺めながら、だつてダンスなんて強制生き恥晒しだぜ、人権侵害だぜと豪語した。

「その紙代および印刷費はどのくらいになるね、会計」

「え、知らない。んなもん、請求きてから足してみればいいじゃん」
「赤字が出たらどうする」

「出ない出ない！ 学祭実行委員会の埋蔵金は永田町よりすごいよ」
また例えば中学二年の冬。スポーツクラブのスキー合宿で、こいつは開始三分で板流れを起こした。うかれてスキー板でそりをやって転倒と同時に手を放しやがったのだ。そして猛スピードで流れていく板を猛スピードで追いかけていったこいつは、雪山の林で行方をくらました。板と共に去りぬ。

凍死ぎりぎりで見つけたのは私である。

「しかし委員長。人にものを尋ねる時はまず自分の意見を作っているのが礼儀。というわけでまずは、本部メンバーでアイデア出しを行うべきかと存じますが」

「おお、さすがは本部きつての常識人。総務の言つとおりだ。まずは我々で恋心培養企画千本ノックといこうじゃないか」

そしてアホの極めつけがああ真夏の飛行実験だ。

人間と生まれたからにはどんなアホであっても、ある程度の高さから転落したら死亡するということは本能的に知っているはずである。なんて考えはあの夏を境に私の中から消えた。世の中には自分の命の危険をまったく顧みない種類のアホが確実にいる。しかも、このアホが登ったのはこの国でもっとも高い電波塔である。こいつ

は若干十歳で、時々現れて世間を騒がすいわゆる「クモ男」と化した。こんな男と友人だなんて人生の汚点だ。

幼少のみぎりよりまっとうな私は、慌てて追いかけて地上十五メートルで暴拳をくい止めた。まっとうなことをしたのにこいつと一緒に「クモ少年」扱いされ、新聞の小さな記事に恥を晒した。社会は残酷である。

その後、中学、高校とこの腐れ縁を断ち切ることあたわず、とうとう青春のもっとも重要な舞台である大学までも共にしている。いいか、世間一般で言われているように私がこいつを追いかけていったのでは断じてない。こいつが、気付いたら私の第一志望の大学に私より先に推薦で入学を決めていただけなのだ。腐れ縁が恒久化することを恐れ、進学が就職かさえ明らかにしていなかったというのに、ぴたりと志望校一本を狙い澄まして撃ち落とされた。

この男のせいで長年志望してきた大学と袂をわかつのも癪であるが、この男とはここで袂をわかつておかないともはや一生逃げられないに違いない。多感な十八の少年だった私の葛藤をお察しあれ。

そして覚悟をきめて入試に臨み、合格を勝ち取ってやってきた新たなステージで、私はこの男に人生の青写真を完膚なきまでにびりびりに引き裂かれたわけだ。このアホはアホの祭典を司る伏魔殿に嬉々として私を引きずり込み、精神や頭脳や肉体の修行に励むべき時間をことごとくアホの祭典の準備と実行に浪費させた。学祭実行委員会の本部決めなんて、まずはいち委員だった時代の出席率が高いやつがピックアップされるもんだ。我々はそれに関して間違いなくワンツーフィニッシュを決めていたと自認する。結果学祭の運営にワンツーで貢献していたかと言うと、疑いをはさむ余地があり過ぎてもはや余地なのか使用地なのか分からない。

その出席率が私のありもしない志を諸先輩にこれでもかとアピールする結果となり、こうして三年になってもアホの祭典に一年間を捧げるよう運命づけられてしまった。夏休みなんぞあったものか。その上、こうなってしまったからには当然、来年も本部OBとして

差し入れをたかられたり警備に駆り出されたりするんだろう。

私は、自分が学生時代のすべてを費やしたからといって、無闇とその場を神聖化するのは弱者のすることであると考える。

自己の青春の真の価値を見極める。でなければその後の人生の本番を生き抜けはしないのだ。

「……そうか。とすると三百人がひとりの乙女を巡って入り乱れるスペースが必要であるから、体育館では場所が、て聞いてんのか外交！」

「聞いてるわけがない！」だから私は断固主張する。「聞く価値がない！」

「そんなこと言わずに聞いてよ」

ソウはおどけて言うけれども、ぼくは聞きたくなんかない。だって納得いかないだろ？

夕立に乗るのは危険なんだ。あいつら荒っぱいんだから。

「だってお前も見たる？ 一頼いちよりのメール」

「見たけどさ」ていうか見せつけられたんだけどさ。「だからって今すぐ、しかも雨に乗って行くことないだろ。それに、連絡したその日の内にここから一頼のところで飛んでってごらんよ。びっくりされて問いつめられるに決まってる」

「別に困らないよ。偶然近くに旅行でもしてたって言うし」

「蒼司郎！」

「ねえウイ。頼むよ。はじめての、しかもかなり確実な手がかりじやん。じーさんたちはもう諦めちまってるんだ。俺が行かなきゃ」

「……もう！」

なかなか見えないと思うんだけど、ソウって意外と頑固なんだよね。特に「お兄ちゃん」のことになるとさ。

「頑固もの！」

「ありがとう！」悪口言ったのにソウは満面の笑顔。「そうこなく

「つちゃ、やっぱりウイは違うよ」

「なんかさあ、ほんと納得いかないよね。表情ひとつで人心掌握してる人種って。掌握されてんのぼくだけだ。」

「最初っからぼくが反対しきれないって、ソウは確信してるんだよ。腹立つな。」

「気をつけてよね」

「だいじょうぶ。俺はゲリラ豪雨だって渡れる」

「初心忘るべからず！」

「はいはい」

「うちの縁側から、ソウが空を見上げる。夕方になって、あんなに晴れてた空が急に暗くなってる。真夏の夕立が近い。ぼくにも、ソウにも、雨が来るタイミングはよく分かるんだ。」

「最初のひと粒を、逃さないのが大事。」

「ソウがひょいと挙げた手のひらに、待ってたみたいにして雨粒が飛び込む。ソウがそれを掴むと、雨は次々に落ちてくる雨を伝って、一本の糸になる。」

「あっという間に土砂降りになった黒雲の空に向かって、まっすぐ伸びる一本の線。」

「ぼくはソウの右肩に乗って、右の耳たぶにしっかりとつかまる。ソウは確かにうまいけど、やっぱり乗るのがタ立だからさ。振り落とされたら大変だよ。」

「え？ 人の肩に乗れるかって。そりゃ乗れるよ。いつもの定位置だよ。」

「なに？ ぼくが何者か？ なんでそんなこと聞くの？ ていうか……あ、もう行くつばいから、聞きたきゃまた今度ね。どこへって？ そりゃ空へだよ。そ・ら・へ。」

「信じられないならそのまま見てたら？ じゃあね。ソウ急いでるからさ。」

おばあちゃんちおばあちゃんち、てあたしもよっちゃんも言ってるけど、ここってほんとはおじいちゃんちじゃないかと思うのね。だってなんだか、おじいちゃんって柱みたい。ああして縁側に立ってキセル吸ってるよね、おじいちゃんがそこから動いたらおうちが潰れちゃうんじゃないかって気がする。

よっちゃんにそう言ったら、美枝^{みえ}はばかだなあ、だって。ばかなのかなあ？

「おお、ほほ。来たか！」

よっちゃんが、じいちゃん、て言つと、おじいちゃんは振り返つて、ほとんどお口を動かさないでそう言う。

「何見てたの？」

「夕立に、しずく渡りの舞う季節」

「え？」

よっちゃんはおじいちゃんの見えた空を、おんなじように軒の下から見上げる。あたしたちが到着した途端に、いきなり夕立が来たの。ものすごい雨だったんだけど、おばあちゃんにご挨拶して、よっちゃんとふたりだけでこのおじいちゃんのお部屋まで来る間に、ほとんど止んじゃったみたい。駆け足雨だ。

「ねえ、今日、何やる日なの？」

「うん？」

お父さんにさんざん聞いたことを、よっちゃんはおじいちゃんにも聞いてみる。答えてくれないのはおんなじだと思っただけ。あたしも知らないよ。今日はみんなが集まって、ここで何をするんだろう？

「今年は特別だぞう」

おじいちゃんはキセルの灰を手を受けてにやり。いつも思っただけど、熱くないのかなあ。

「お前たちがめでたく十歳になった年だ。いつにも増して盛大にやらにや」

あたしもよっちゃんも、頭の上にハテナマークがぼっかり。

一緒に生まれたあたしたちは、確かに今年一緒に十歳になったんだけど、だからって何を盛大にやるのか分かんない。お誕生日パーティーじゃないのは確実なんだよ。だってあたしたちが生まれたのは五月だし。それにおばさんが、お饅頭が届かない届かないってお台所で騒いでた。お誕生日ならケーキでしょ？

あたしたちがお互いのハテナマークを指でつついたり、曲げたり伸ばしてみたりしていると、風船みたいに膨らんでいたそれらが全部いっぺんにぱん！と弾けとんだ。あたしもよっちゃんも小さいころから道場に行ってるから、目がとってもいいらしいよ。だから見たのかな。その時あたしたちのハテナマークを突き抜けていった、小さな青い雨粒みたいなものが。

「おうっ」

あたしたちがまったく同時におんなじ方に首を回した途端、おじいちゃんが唸った。あたしには見えたよ。青い粒がおじいちゃんの普段はどこにあるかも分かんないおヒゲの中のお口の中に、すごい速さで飛び込んでったの。

「じ……じいちゃん」

たぶんおんなじものを目撃したよっちゃんが、恐るおそる言う。

「だいじょうぶ？」

あたしも恐るおそる言う。

「……ふうむ」おじいちゃんはおヒゲをもぐもぐして、いきなり叫んだ。「よからぬ妄想の味がするな！」

新しいハテナマークは、よっちゃんのとくつついてひとつに混ざって、お部屋いっぱい膨らんだ。もうそうってなあに？

「饅頭が届いたようだ」

「まんじゅう？」

「なんで分かるの？」

「私にはなんでも分かるのだ」おじいちゃんはあたしたちの背中を一緒に押した。「もう十年もすれば、お前たちにも分かるかも。さあ、ばあさんとこへ行こう」

あたしがおじいちゃんをこのおうちの又シミたく思つのは、こういう、わけ分かんない不思議なとこのせいもあるのかも。二十歳になつたつて、あたしたちはおじいちゃんみたくならないよね。

おじいちゃんは何かが楽しみで仕方ない子どもみた、あたしたちを押して廊下に出て、鼻唄しながら歩いてく。ご機嫌のおじいちゃんはよく呪文みたいなのを言う。お歌ですよ、てお母さんが教えてくれたけど、お歌ってなんのことだろ。少なくともね、あたしたちがいつも聞くみたいな歌とは違うと思うよ。だって短いし、メロディとかもないもん。

大きなおうちのながーい廊下の途中で、お台所を通り過ぎる。中からラジオの音とおばさんたちの声がする。まあゆとりの丘ですつて。まああんな高いところから。なんだか真面目な感じで、やたらとまあまあ言いあつてる。

それを聞いたよつちゃんが、押されてつんのめりながら首だけで振り返つた。

「そついやさあ、じいちゃん」

「うん？」

「人間は空を飛べると思う？」

「飛べるとも」

「飛行機とかじゃなくてだよ？」

「もちろん」

「ほんとに？」あたしはそんなことは知らなかったから、思わず聞いちやう。「ね、美枝も？ 美枝も？」

「美枝にはちと無理かな」

「なんだー」

「しかし彼らが夕立を渡ることができるのも、我々のあればこそだぞ」

あたしとよつちゃんは顔を見合せて、あべこべに首を傾げる。相変わらずあたしたちの背中を押すおじいちゃんの口から、さっきの謎の青い粒みたいな、謎の呪文が飛び出した。

「ゆとりも浜も、人知れぬかな！」

▼帰り路

夕闇の空から突然落ちてきた雪を逃れ、乗り込んだ電車はたいへん混雑していた。私は押し流され、有無なく三人がけの正面に落ち着かされた。

その座席では、小さな兄弟が両親だろう若い男女に挟まれ、過度の愛情に着膨れしながらなお貧弱な尻を並べていた。左側のより小さい方は、すっかり靴を脱がされて大人しく深いところに嵌りこんでいる。兄貴らしい方は立ったり座ったり忙しくなく、靴のまま座席に乗り上げて窓の外など見ようとしては軽く嗜められる。突然の大雪は冬なりの夕立だったようで、曇りがちの窓の外にはもう何も降っていないかった。降ってない降ってないときりに残念そうにする子ども。そうかと思うと、もう弟とグリンピースとやっている。一度始めたら延々やる。息子が幼いころにやっていた手遊びだ。いまだ廃れずにあるとは驚きだ。

何しろ正面なので、彼らは私の視界に我が物顔で居座る。正直、少々苦痛だったが、どうしようもない。耳につく甲高い声を努力して右から左へ流しつつ、私はいつものことで、完全に無意識に、仕事鞆を網棚に押し上げた。

まったく気遣いが足らなかった。そも雨ならともかく、雪に降られるというのは慣れないのだ。傘に使った鞆の表には一層の雪がこびりついたままだったのである。押し上げたはずみで、それが残らずはがれ落ちた。哀れなのはふたりの兄弟だ。当然、悲鳴が上がった。

「お……失礼」

私はどちらかと言うと両隣の男女に向けて、不明瞭に謝罪した。彼らはにこにこしてそれを受け流し、兄弟の頭の雪を払う。すると母親の骨つばい手の下から、兄貴の方が爛々と輝く目玉を私に向けた。不満そうでも恐れているのでもない。明らかにプラス方向の感

情の昂りが見える。

「すっげー！」

そして私は、賞賛された。

「おじさん、雪降らした！」

弟もそれを聞いて、ほんとー？ と叫んで目を輝かせる。ふたりして、もっかいやって、もっかいやってと繰り返す。母親がやめなさいと言っても、言うことをきかない。

「おじさんがヒヨリなの？」

「はじめて見たー！」

子ども特有の意味不明な言葉に構う余裕はなく、私はひたすら両親に向けてだけ苦笑いし、混雑を押し退けて次の駅で逃げ出した。居心地のよさゆえに、居心地が悪すぎたのだった。

湖影堂一夜

時雨の夜でございました。

ちようど今宵と同じような、冷え込む雨でございます。寢間へ引きあげようと居間の行灯の障子を開けましたところで、ほとほと玄關の戸を叩く音がいたします。耳を澄ませて少し待つと、またほとほといたします。わたくしは灯りはそのまま、表へ向かいましました。

磨り硝子を嵌めた格子戸の向こうに、雨に紛れて人の気配がいたします。声をおかけしますと、男性の声が答えました。

「夜分失礼します。道に迷ってしまったのです。連れが雨に濡れてすっかり参ってしまっております。突然で本当に申し訳ないのですが、今夜ひと晩、こちらでお世話になることはできないでしょうか」しつとり濡れた冷たい空気の中をよく通る、明朗な声音でございました。若い、芳醇な香りがいたしました。わたくしは思わず知らず、手指についた油を舐めとりました。それから微笑んで戸をお引きしたのです。このような山奥の一軒宿は、迷い人のためにあるようなもので、お断りする理由はございません。

お連れの女性を肩に背負うようにして雨の中に立ち尽くしておられたのは、二十歳に届くか届かないかという年頃の、黒髪の男性でした。その方は心底ほっとして、弱々しい笑みを浮かべました。

わたくしはおふたりを居間へお通しして、替えの着物と丹前、麻の手拭い、火鉢をお出してから、たすきを掛けて湯を沸かしに参りました。沢から引いた水が戸井を伝って桶に満ちるのを見届けて、外へ回って火をくべました。雨を吸った薪はなかなか燃え上がり、往生いたしました。が、なんとか準備が整いましておふたりをお呼びしました。

おふたりが一緒になって浴場へ向かわれた後、わたくしは台所に入り、わずかな蓄えで出来る限りのお献立をご用意しました。そう

しながら、雨の音と、時折聞こえてくる浴場の水音に耳を傾けました。静かな音は、この宿と山とを、世間からしつとりと覆い隠してゆくようでした。そうした夜には、どこか俗世とは別の世界の地に足が付くとても申しますか、気持ちはいっかりと座っているのに心臓がいつもよりひと回り小さくなっているような、くらりとした心持ちがいたします。毎日手入れを欠かさなかった菜切り包丁が山菜のぬめりを纏って、妖しい蛇のようにぬらりと光るのです。

ふと高い笑い声がし、すぐに止まりました。わたくしは浴場のおふたりの様子を想像しました。

夜は更けていましたが、かなり長いこと山を彷徨っておられたためでしょう、おふたりはわたくしのお出したお食事を気持ちよくお召しになりました。わたくしは割った白酒をいただきながら、同座させていただいておりました。すっかり温まって、男性のお顔には豊かな表情が戻られていました。女性の方のお顔を、その時になつてようやくまともに拝見しましたが、いかにも純朴な、愛嬌のあるお顔でした。

「あれはなんですか？」

なんのお話の最中でしたか、男性が居間の調度にご興味を示されました。

うちはご覧のとおりで、古い場所ですから、街の方々にすると不思議なものもそれはございますでしょう。しかし、その方が指差されたのは床の間でございました。床の間に、掛け軸の代わりのように置いてあった、ひとつの壺でございました。

それは先代のころからずっとそうして置いてあった壺で、先代もそのまた先代のころからずっとそうして置いてあったと申しております。小脇に抱えておけるほどの大きさで、丸みのある形をしていながらすらりとした印象があり、青釉の深い色味の中に秋の稲穂を模した模様が走っております。口は油紙と縄とで厳重に封じてあり、美しい立ち姿に、それだけが剣呑な、異様な雰囲気添えておりました。わたくしも、先代も、そのまた先代も、その封印を開

いてみたことはなかったのです。

「開けてみたいと思わないんですか？」

女性が、なんの裏もない、純粋な興味のある声で言われました。

「何か入っているのかも知れないし。どういう来歴のものなんでしょう？」

それだけは、代々語り継がれておりましたので、わたくしは答えることができました。

あなたがもし街の方でしたら、湖影伝説を聞いたことがありでしょう。昔々、この山の向こうの丘の周り一帯に、それは大きな湖が広がっていたことを。そしてその湖が、一夜にして忽然と消えてしまったというお話を。

壺は、その湖が干上がった当時に、湖心で見つかったものなのだそうです。そこが湖だったころには、わざわざ船を出さなければ行けないような場所の底に、ただぼつねんとあつたそうです、その時にはもう、口は油紙と縄とで嚴重に封じてあつたそうなのです。誰がそんな手間をかけて沈めていったのか、何かの偶然だったのか、嘘なのか誠なのか、わたくしには分かりかねます。

そうしたお話から、先代はその壺を湖影壺と呼び、わたくしもそれにならいました。壺を開けてみることも、先代がそれをしないままに逝つたので、ならっているだけなのです。

「へえ……」

おふたりはすっかり感心され、しばらくの間黙って壺を見つめておられ、それからお顔を見合わせて、何かおふたりにしか通じ合わない目のやり取りをなさったご様子でした。

おふたりにはお客さまの寝室でお休みいただいて、寝間でひとり横になりましてからも、わたくしの眼裏には、その時の男性の瞳と横顔の繊細な輪郭と、おふた리를包む一種特別な空気とが流れて、なかなか眠りにつくことができませんでした。雨は飽くまで静穏で、しかし一度意識してしまうと耳に張りついたようで、もう二度と離れません。小さくなって小鼠のような早さで動いていた心臓が、と

うとうなくなつてしまつたように感じました。雨は、人を、異界の地に根付いた心臓のない生き物に、変えてしまうのです。

それは、恐ろしく空虚な感覚でした。

寝間の戸が雨よりも静かに開き、人影が滑り込んで参りました。わたくしは驚き、しかし身動きが取れずに布団の中で身を固くいたしました。その配が湿つた空気を伝つてしまつたのでしょうか。人影は足音をひそめていたのから一転、こちらに飛びかかつて参りました。一瞬、喉もとがひやりとし、直後とんでもない熱さを発しました。その後のことはもう、見た覚えがないのです。ただひたすら、空虚な感覚に満たされておりました。ああ、終わるのだ、と思つたのです。

次にわたくしが気付いた時には、わたくしはもう、今のようになつていて、毎日手入れをかかさなかつた菜切り包丁は刃がこぼれて何か赤黒いものにまみれて錆ついておりました。それから、あの壺が床の間から、忽然と消えておりました。おふたりのお姿も、どこにもございませんでした。

そういうわけでございますので、今宵のお泊まりをお断りする理由はございませんのですが、わたくしは今、寝間で、きつと人様を驚かせてしまうに違いない姿になつてしまつたのです。それでも構わないとおっしゃるのですたら、喜んでこの戸をお引きするのですが、いかがいたしましたでしょうか……お客さま？ 聞こえていらつしやいますか、お客さま？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4618n/>

雨夜の星

2011年11月4日03時31分発行